

第3部 子供の学び

1 学校の種類と学校選択の理由

(1) 学校の設置者

回答者が在籍している学校の設置者（保護者票の回答）は図表 3-1-1 のとおりである。

図表 3-1-1 現在在籍している学校の設置者

	小学5年生	中学2年生	16・17歳
公立	91.7%	73.3%	44.1%
私立	3.6%	20.7%	52.2%
国立	0.9%	3.1%	1.6%
その他	-	-	0.4%
無回答	3.8%	2.9%	1.7%

※公立：区立、市立、都立 国立：国立、公立中高一貫校

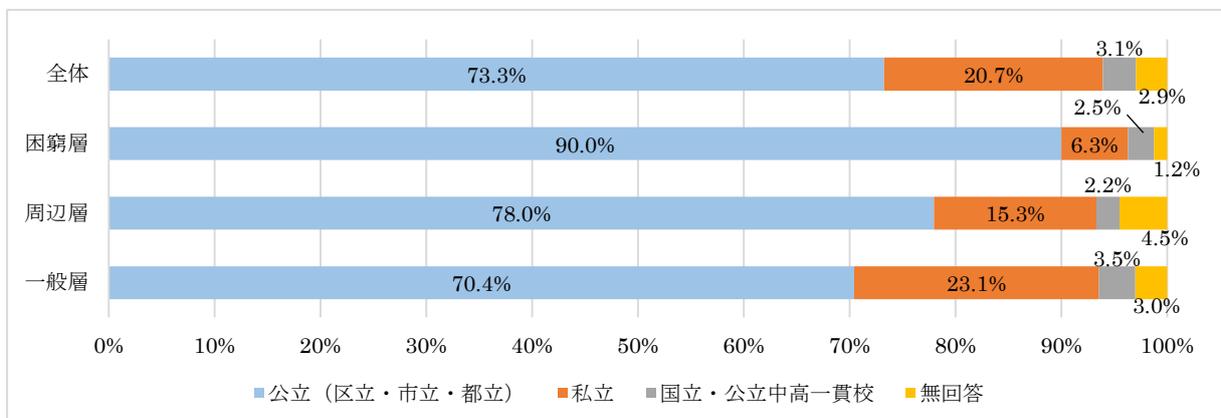
(2) 中学2年生の学校選択の理由

中学2年生の保護者に、在籍する学校の設置者を聞いた。公立中学校に通っているのは73.3%、私立中学校は20.7%であった。この割合を生活困難度別に見ると、困窮層は一般層に比べて公立を選択する割合が高く、90.0%である。公立以外に進学する割合は、一般層では26.6%であるのに対し、周辺層は17.5%、困窮層は8.8%であった。

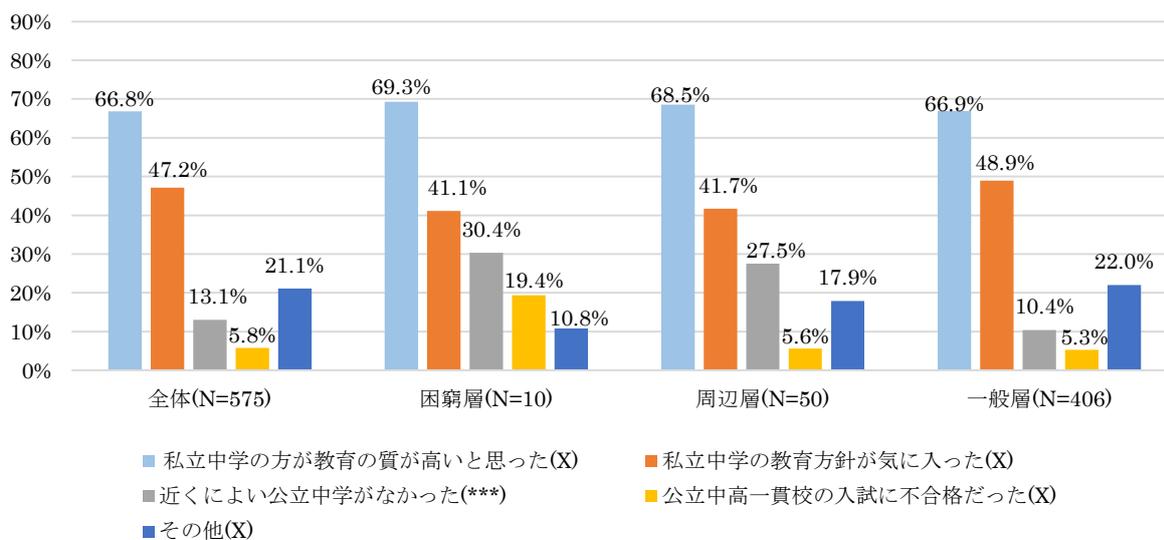
中学2年生の保護者に、子供が私立中学校に進学した理由を聞いたところ、生活困難度別のどの階層でも「教育の質が高いと思った」がいちばん高く、「教育方針が気に入った」が次に高かった。しかし、その一方で私立中学校に通う困窮層、周辺層の保護者の約3割が、教育内容等ではなく、「近くによい公立中学がなかったから」を進学の理由としており、この点で全体及び一般層の回答傾向（全体、一般層は約1割）と差がある。また、困窮層では「公立中高一貫校の入試に合格しなかった」が19.4%と、他の階層の3倍以上である。

世帯タイプ別に見ると、「私立中学の方が教育の質が高い」と回答したのは、ふたり親（二世帯）世帯で約7割である一方、ひとり親（二世帯）世帯では約5割である。

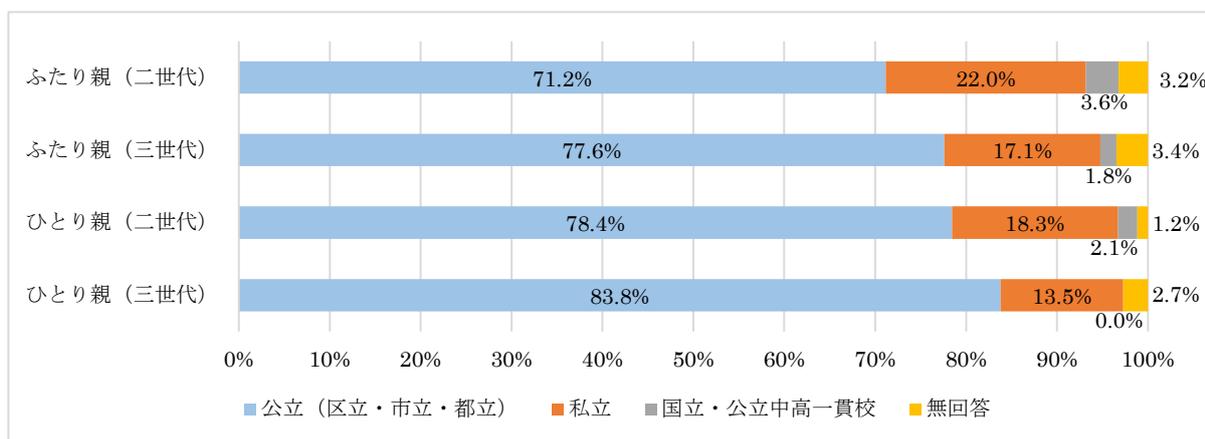
図表 3-1-2 在籍する学校の設置者(中学2年生):全体、生活困難度別(***)



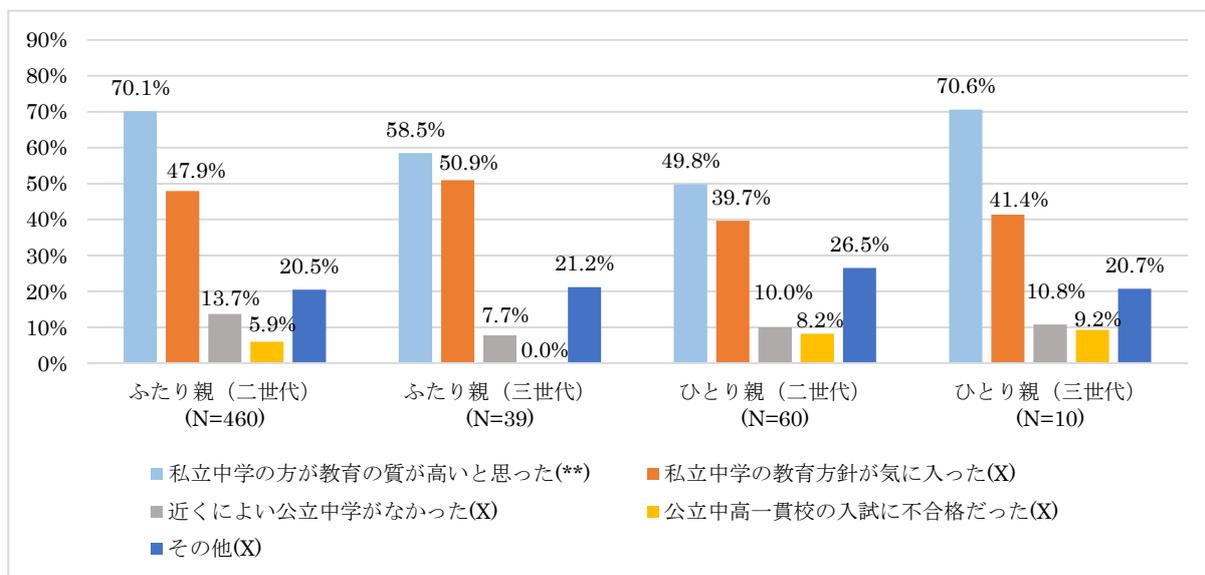
図表 3-1-3 私立中学校に進学した理由(中学2年生):全体、生活困難度別



図表 3-1-4 在籍する学校の設置者(中学2年生):世帯タイプ別(**)



図表 3-1-5 私立中学校に進学した理由(中学2年生):世帯タイプ別



(3) 16-17歳の学校選択の理由

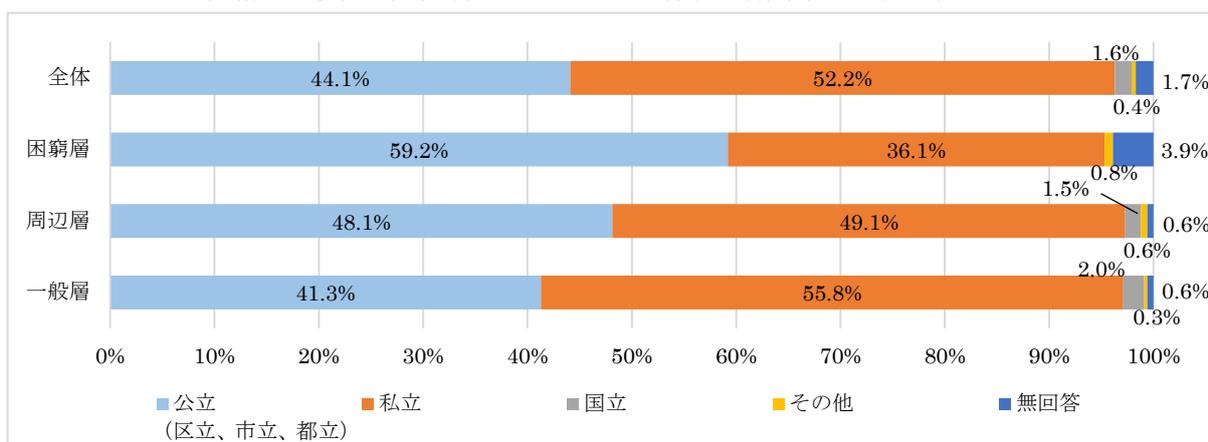
16-17歳の91.4%は全日制の高等学校、4.9%は定時制又は通信制の高等学校に在籍している。学校の設置者は、公立が44.1%、私立が52.2%で、私立の方が割合が高い。

生活困難度別に見ると、一般層の57.8%が私立又は国立に在籍している一方、困窮層は36.9%であり、統計的に有意な差がある。

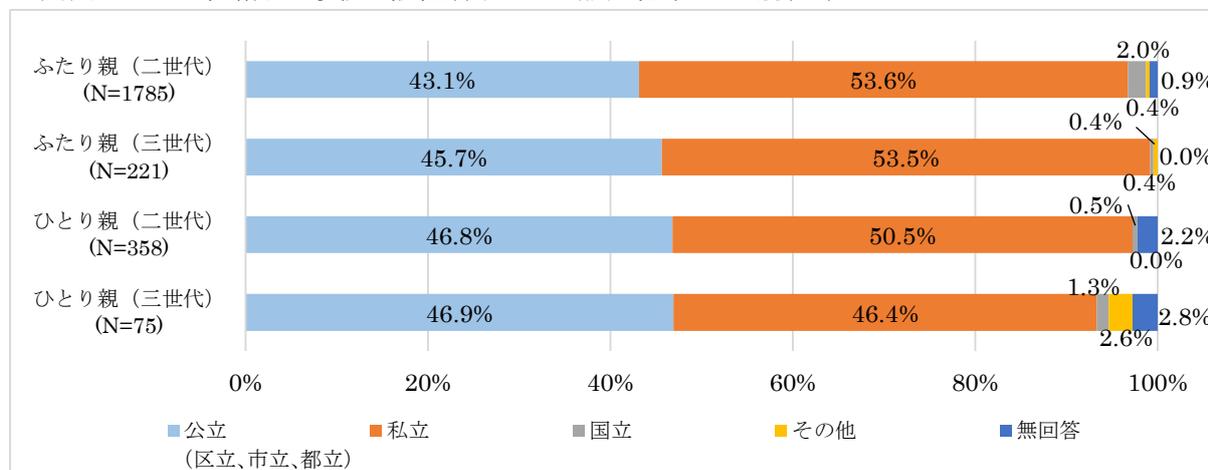
図表 3-1-6 16-17歳の就学状況

就学状況	割合
高等学校（全日制）に在籍	91.4%
高等学校（定時制）に在籍	2.3%
高等学校（通信制）に在籍	2.6%
特別支援学校（夜間中学を含む）に在籍	1.3%
高等専門学校に在籍	1.3%
専修学校（高等課程）に在籍	0.2%
中途退学した	0.4%
いずれにも在籍したことがない	0.2%
無回答	0.3%

図表 3-1-7 在籍する学校の設置者(16-17歳):全体、生活困難度別(***)



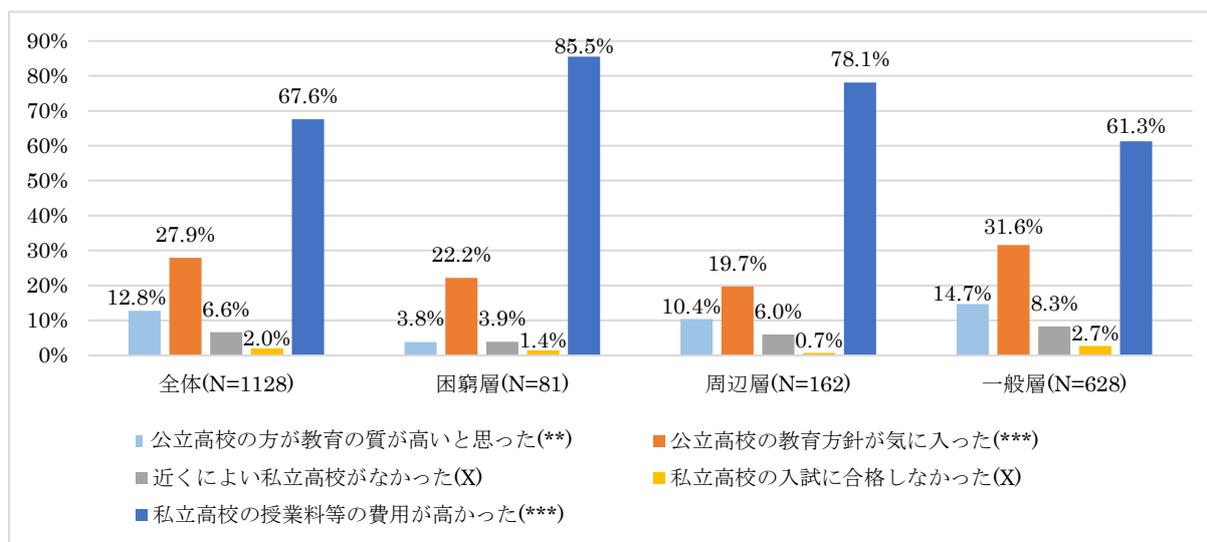
図表 3-1-8 在籍する学校の設置者(16-17歳):世帯タイプ別(**)



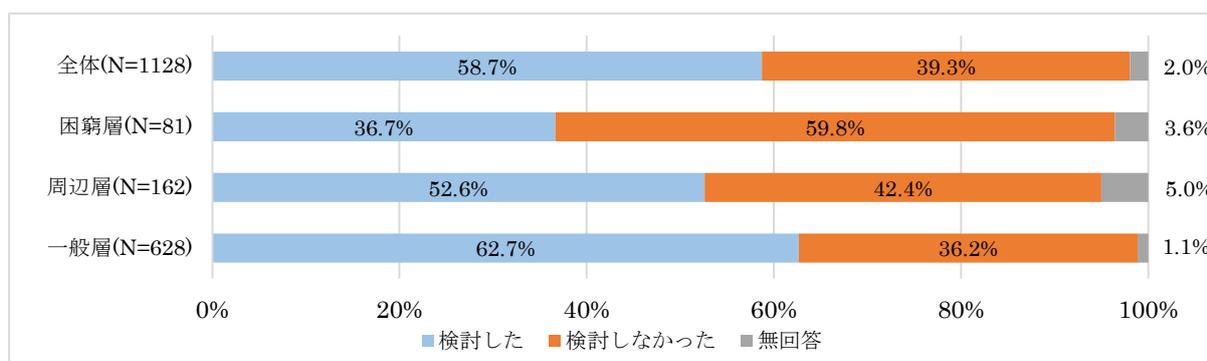
公立に在籍する高校生の保護者に公立高校に進学した理由を聞いたところ、67.6%が「私立高校の授業料が高かったため」としている。質や教育方針などで学校を選んだのは、公立では約1~3割、私立で約3~4割であった。

私立高校に行くことを検討したかについて生活困難度別に見ると、一般層は約6割が検討したのに対し、困窮層は約6割が検討せずに公立高校への進学を決めている。公立を選んだ理由として、「私立高校の授業料等の費用が高かったから」が一般層では61.3%であるのに対し、周辺層は78.1%、困窮層は85.5%であり、経済的な理由で選択肢が限られてしまっていることがうかがえる。

図表 3-1-9 公立の高等学校に進学した理由:全体、生活困難度別

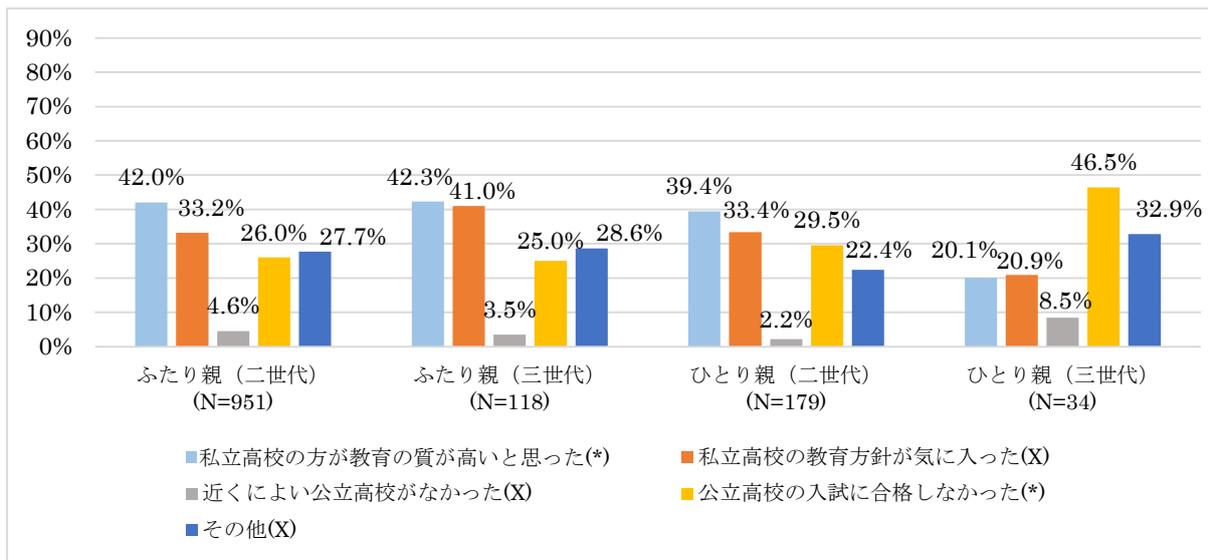


図表 3-1-10 私立高校進学を検討したか:全体、生活困難度別(***)

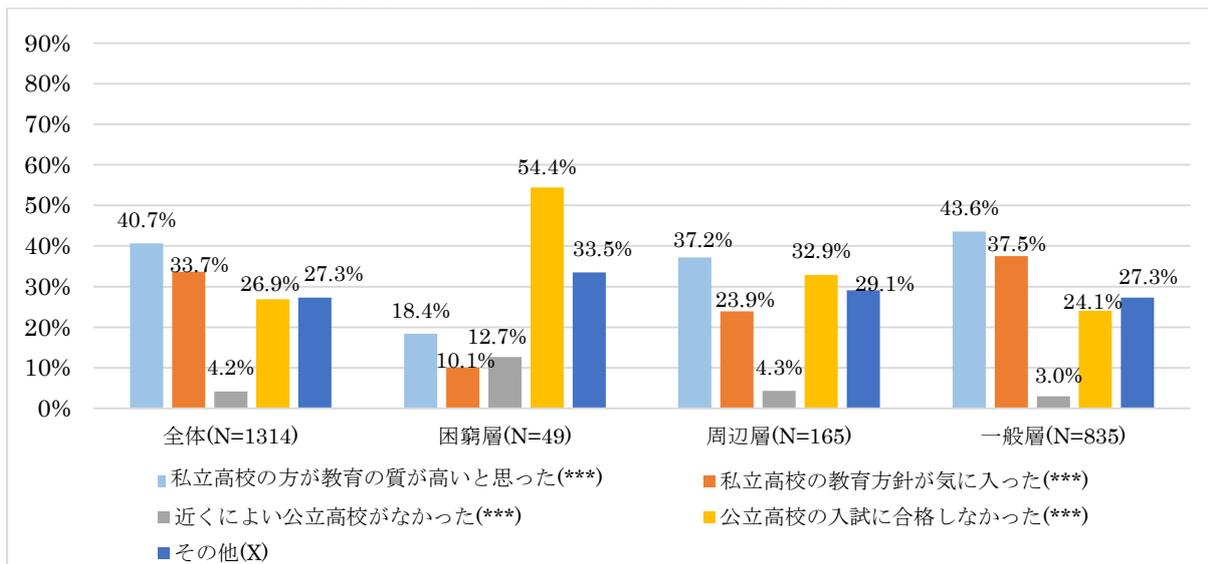


一方、私立に在籍する高校生の保護者に私立高校を選んだ理由を聞いたところ、一般層では「教育の質が高いと思った」(43.6%)、「教育方針が気に入った」(37.5%)が多いのに対し、困窮層では「公立高校の入試に合格しなかった」(54.4%)がいちばん高くなっている。世帯タイプ別では、ひとり親(三代目)世帯で「公立高校の入試に合格しなかった」が46.5%と高い。私立高校に子供を通わせる世帯の家計の状況(全体)を見てみると、「赤字」が18.8%、「赤字でも黒字でもなく、ぎりぎり」が31.9%であり、約半数の世帯が、家計が厳しい中、子供を私立に通わせていることがわかる。とりわけ困窮層は73.5%が「赤字」であり学費が家計を圧迫していることがうかがえる。

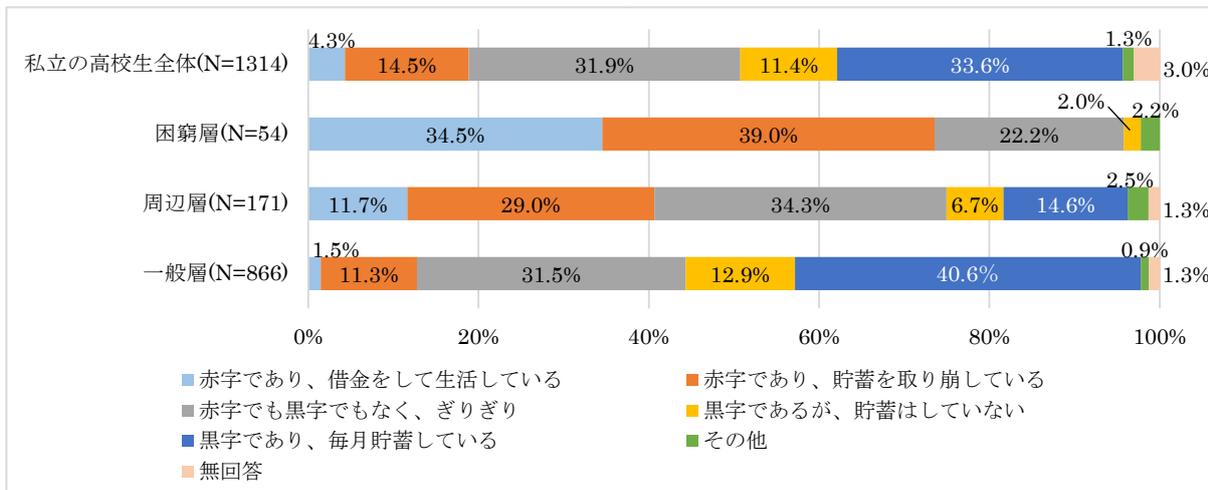
図表 3-1-11 私立高校に進学した理由(16-17歳):世帯タイプ別



図表 3-1-12 私立の高等学校に進学した理由:全体、生活困難度別



図表 3-1-13 私立高校に子供を通わせる世帯の家計の状況:全体、生活困難度別(***)



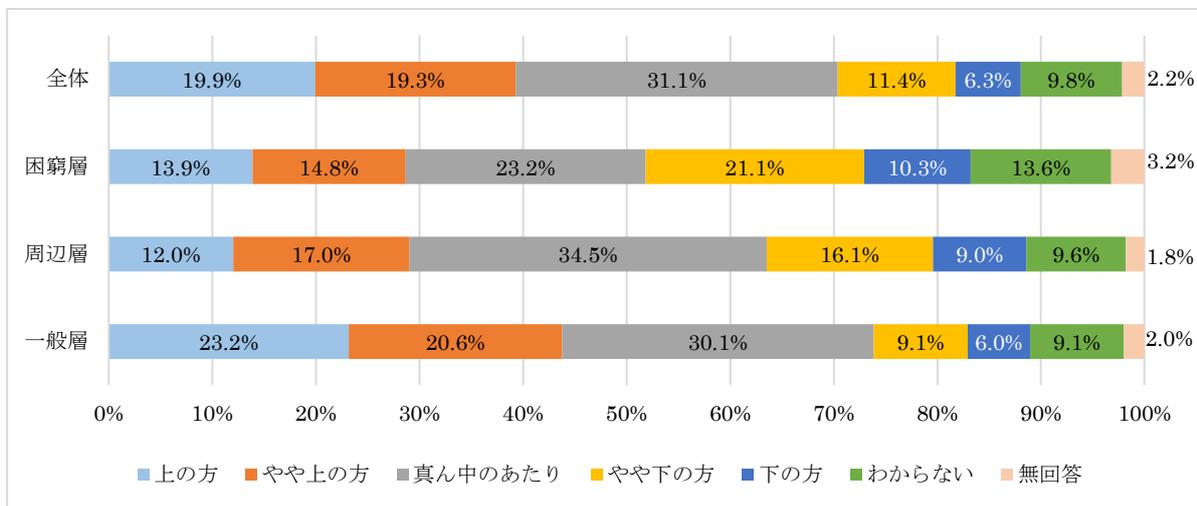
2 学校の成績についての主観的評価

(1) 小学5年生

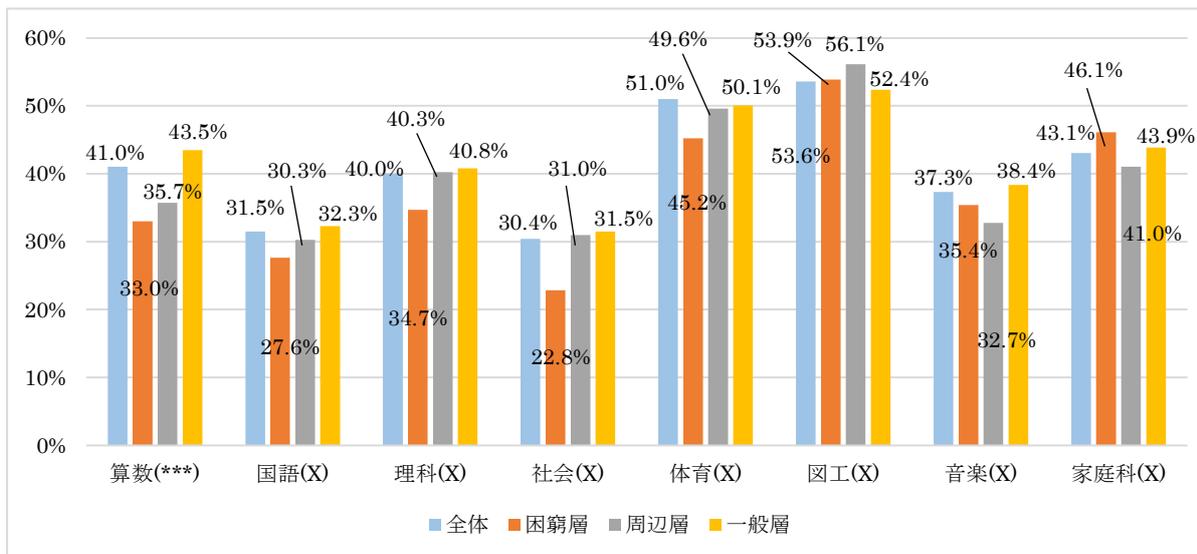
子供に自分の成績について「クラスの中でどのくらいだと思いますか」と聞いたところ、全体で見ると、小学5年生の19.9%が「上の方」、19.3%が「やや上の方」と答えているが、一方で6.3%が「下の方」、11.4%が「やや下の方」と回答している。生活困難度別で見ると、自分の成績が下の方だと感じる子供は生活困難度が上がるほど高くなる傾向にあり、困窮層の31.4%の子供が自分の成績を「やや下の方」、「下の方」と感じている。「得意な科目」について聞いたところ、算数以外の科目で生活困難度別の統計的な有意差は見られなかった。算数を「得意」とする子供の割合は困窮層がいちばん低い。世帯タイプ別では、成績の主観的評価に有意差は見られなかった。

なお、困窮層の82.3%は学校でのクラブ活動を「とても楽しみ」又は「楽しみ」と答えており、一般層（79.2%）よりもやや高かった。

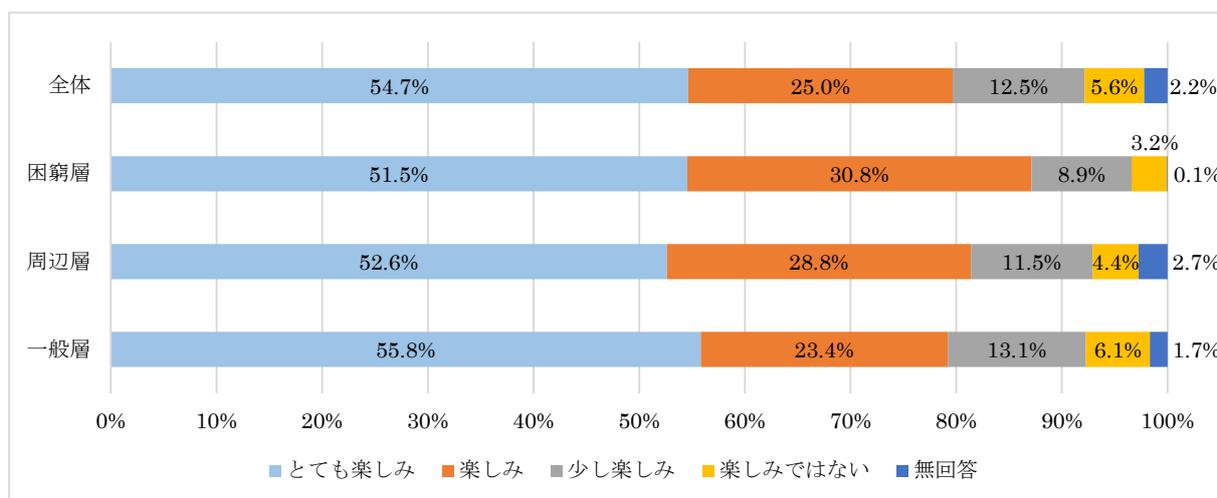
図表 3-2-1 成績の主観的評価(小学5年生):全体、生活困難度別(***)



図表 3-2-2 得意科目(小学5年生):全体、生活困難度別



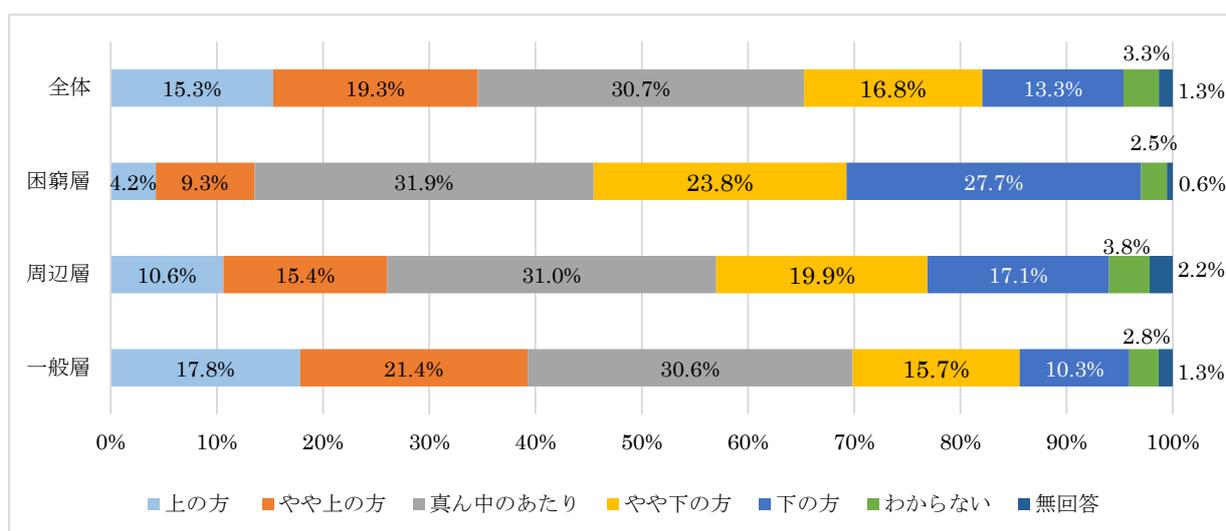
図表 3-2-3 学校でのクラブ活動を楽しみにしている(小学 5 年生):全体、生活困難度別(***)



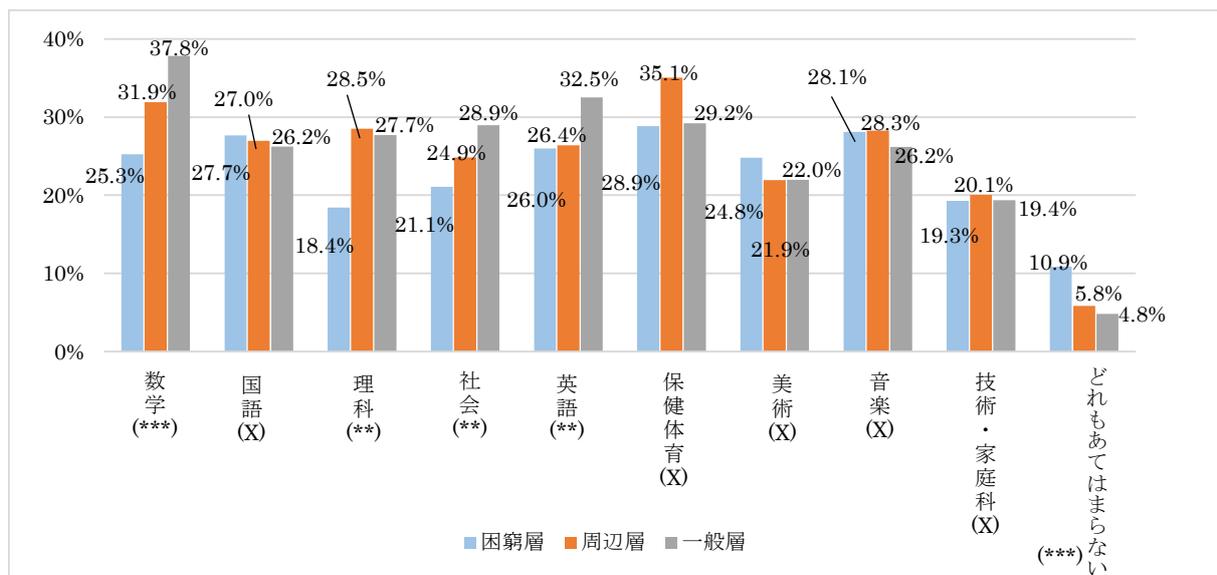
(2) 中学 2 年生

中学 2 年生になると、小学 5 年生に比べて、全体的に自分の成績の評価が下がる傾向がある。中学 2 年生の 13.3%が「下の方」と回答しており、この割合は小学 5 年生 (6.3%) の約 2 倍である。また、生活困難度別に見ると、中学 2 年生では困窮度が上がるにつれ自分の成績が下の方だと感じる子供の割合が増え、困窮層の 51.5%が自分の成績を「やや下の方」、「下の方」と感じている。得意な科目について聞いたところ、数学、理科、社会、英語で有意差が生じており、困窮層でこれらを得意な科目とする子供の割合が相対的にいちばん低い。また、困窮層の 10.9%は「どれもあてはまらない」と回答しており、得意な科目が一つもないと感じている。なお、世帯タイプ別では、成績の主観的評価は有意な差は見られなかった。

図表 3-2-4 成績の主観的評価(中学 2 年生):全体、生活困難度別(***)



図表 3-2-5 得意科目(中学2年生):生活困難度別



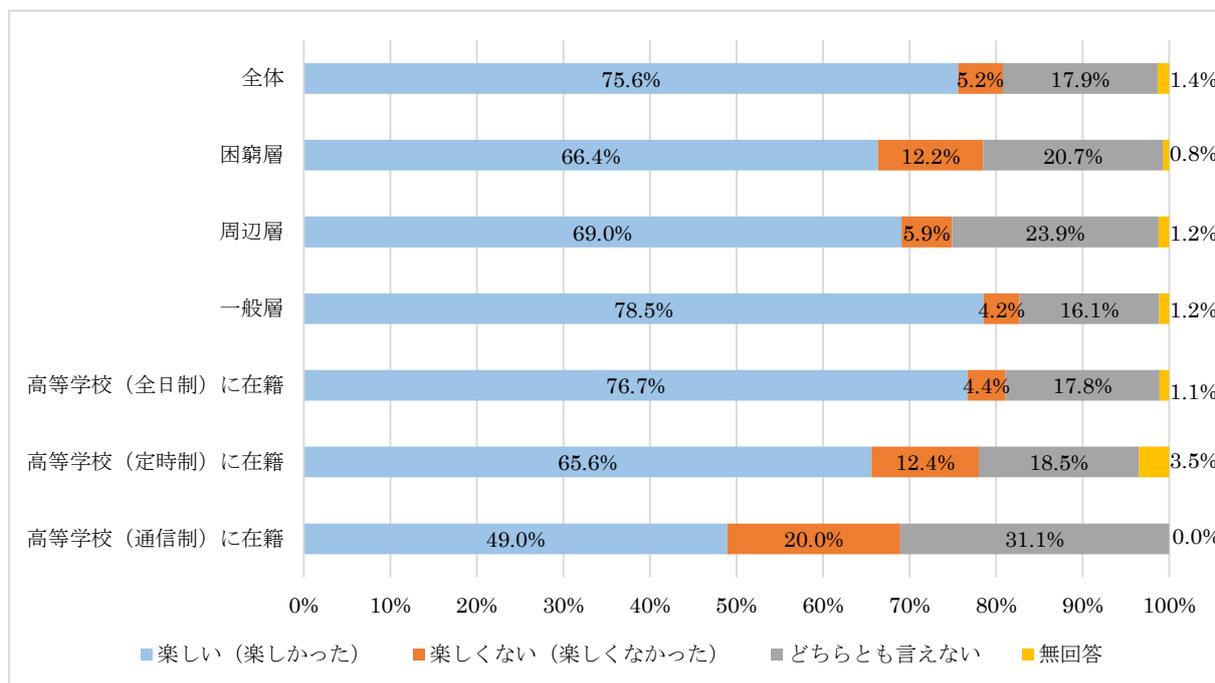
(3) 16-17 歳

高校での学びは、学校ごとに難易度や専門性が異なるため、「学校が楽しいか」という聞き方で、学校での学びについての主観的評価を試みた。その結果、75.6%は学校を「楽しい（楽しかった）」と回答している一方で、5.2%が「楽しくない（楽しなかった）」、17.9%が「どちらとも言えない」と回答している。生活困難度別に見ると、一般層、周辺層では、「楽しくない（楽しなかった）」が、それぞれ 4.2%、5.9%であるのに対し、困窮層はその約 2~3 倍の 12.2%であった。

中学校卒業後に進学した学校の種類別に見ると、学校の主観的評価がいちばん低い（楽しくない）のは通信制の高等学校（20.0%）、次に定時制の高等学校（12.4%）、全日制の高等学校（4.4%）となっている。

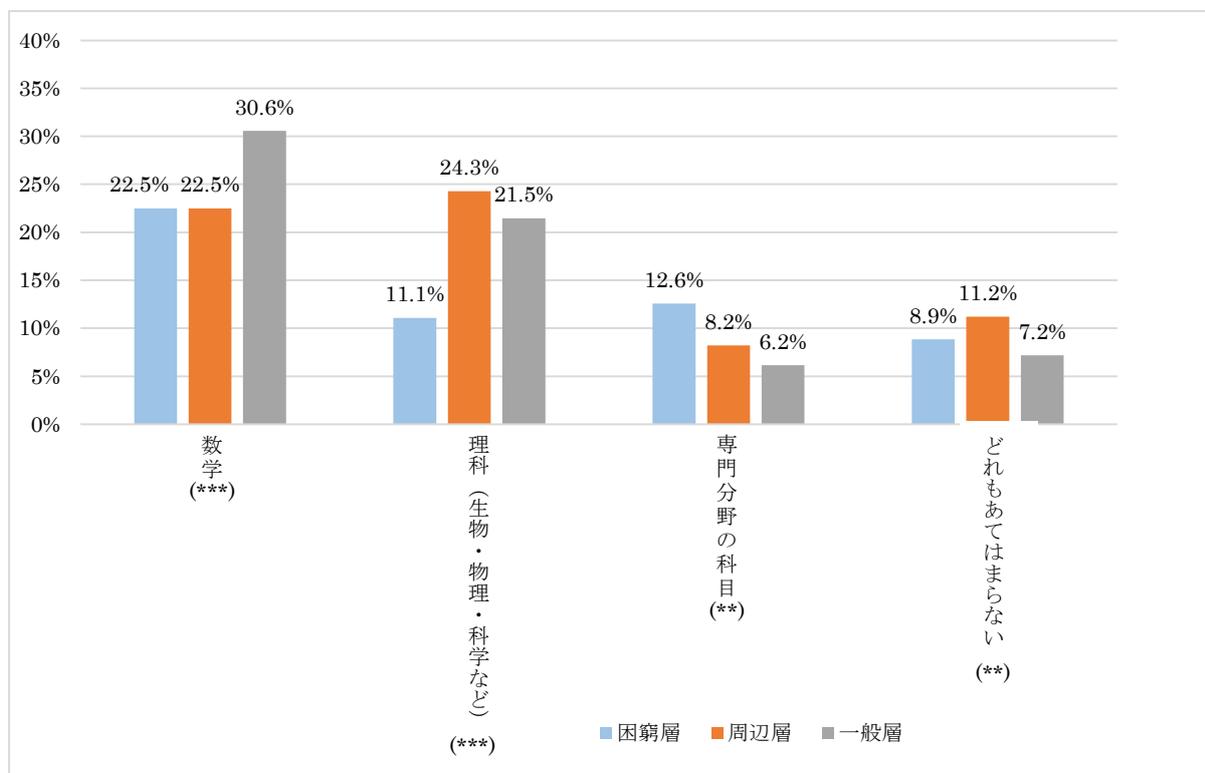
得意な科目について聞いたところ、数学では、一般層では 30.6%、困窮層と周辺層では 22.5%となっている。理科では、周辺層、一般層の高校生の 2 割以上が得意であるのに対し、困窮層は 11.1%となっている。その一方で、困窮層の高校生は、専門分野が得意である割合が 12.6%であり、周辺層、一般層よりも高い。

図表 3-2-6 中学校卒業後に進学した学校の主観的評価(16-17 歳):
生活困難度別(***)、学校の種類別(***)(n=2465)



*高等学校以外の学校は回答者少数のため、分析不可。

図表 3-2-7 得意科目(16-17 歳)(有意差のある科目のみ):生活困難度別



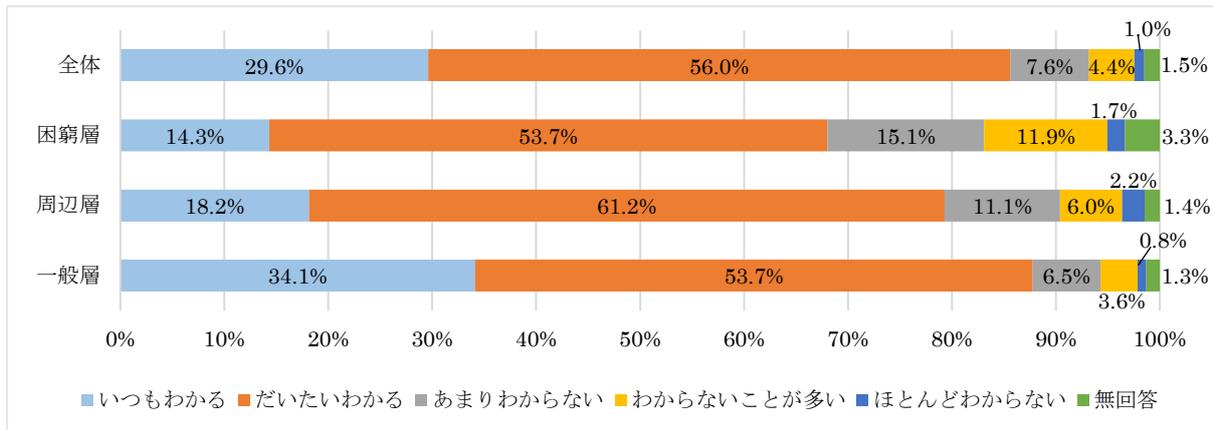
3 授業の理解度・わからなくなった時期

(1) 小学5年生

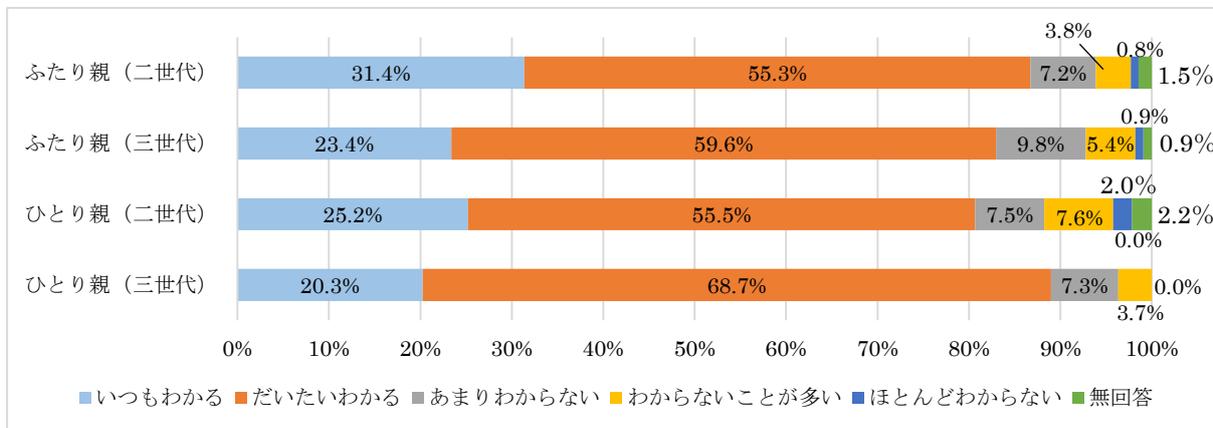
小学5年生に、「学校の授業がわからないことがありますか」と聞いた。その結果、29.6%が「いつもわかる」、56.0%が「だいたいわかる」と、合わせて85.6%が学校の授業を「わかる」と回答している。一方で、7.6%が「あまりわからない」、4.4%が「わからないことが多い」、1.0%が「ほとんどわからない」と回答しており、小学校の段階においても学習に問題を抱える子供が1割以上存在する。この割合は、生活困難度別に大きな差があり、困窮層の小学5年生で授業が「いつもわかる」生徒は14.3%で、一般層よりも約20ポイント低い。困窮層の約3割、周辺層の約2割は、学校の授業がよくわからない（「あまりわからない」、「わからないことが多い」、「ほとんどわからない」）と答えている。世帯タイプ別では、「あまりわからない」、「わからないことが多い」、「ほとんどわからない」と答えている割合が、ひとり親（二世帯）世帯で17.1%、ふたり親（三世帯）世帯で16.1%となっている。

授業が「わからないことが多い」、「ほとんどわからない」と答えた子供に、いつから分からなくなったのか聞いたところ、「4年生のころ」が最も高く37.0%であったが、「3年生のころ」も22.5%、「2年生のころ」は6.6%、「1年生のころ」は7.5%であった。困窮層及び周辺層においては「1年生のころ」が14.2%と一般層に比べて高くなっており、小学校入学後の早い段階から授業がわからなくなっている子供も存在する。

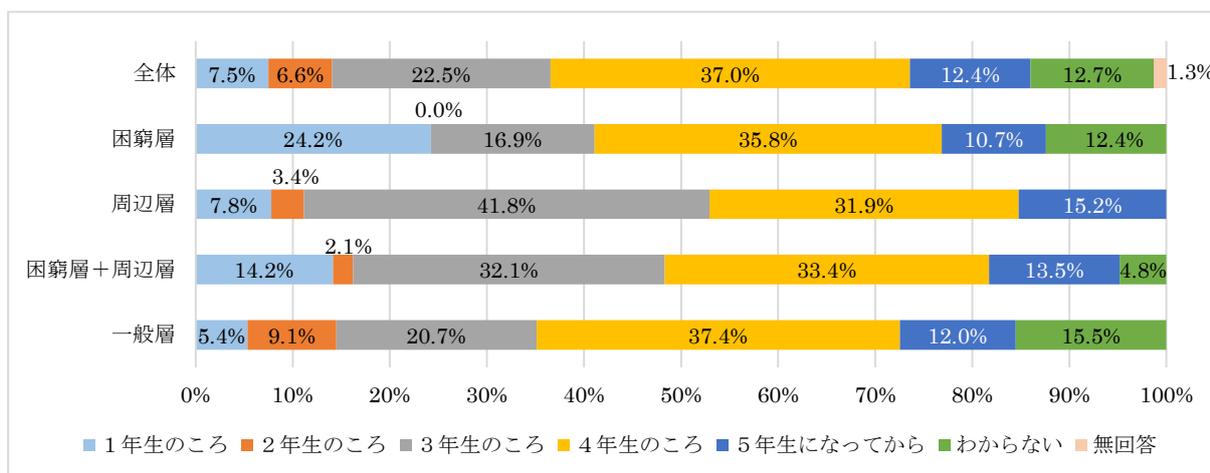
図表 3-3-1 授業の理解度(小学5年生):全体、生活困難度別(***)



図表 3-3-2 授業の理解度(小学5年生):世帯タイプ別(**)



図表 3-3-3 授業がわからなくなった時期(小学 5 年生):全体、生活困難度別(X)



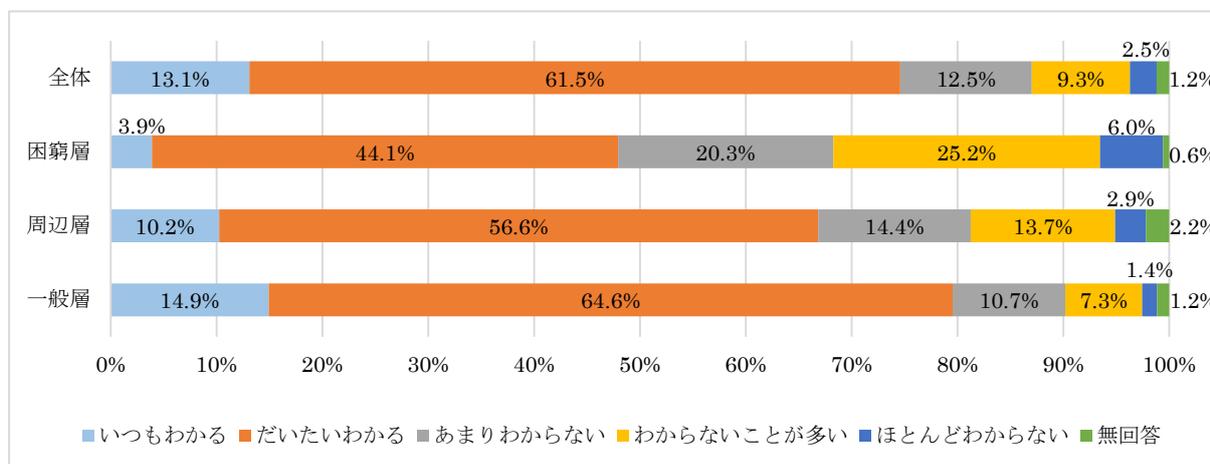
(2) 中学 2 年生

中学 2 年生になると授業がよくわからないと感じる子供の割合は全体的に増え、全体の 24.3%が「あまりわからない」、「わからないことが多い」、「ほとんどわからない」と回答している。

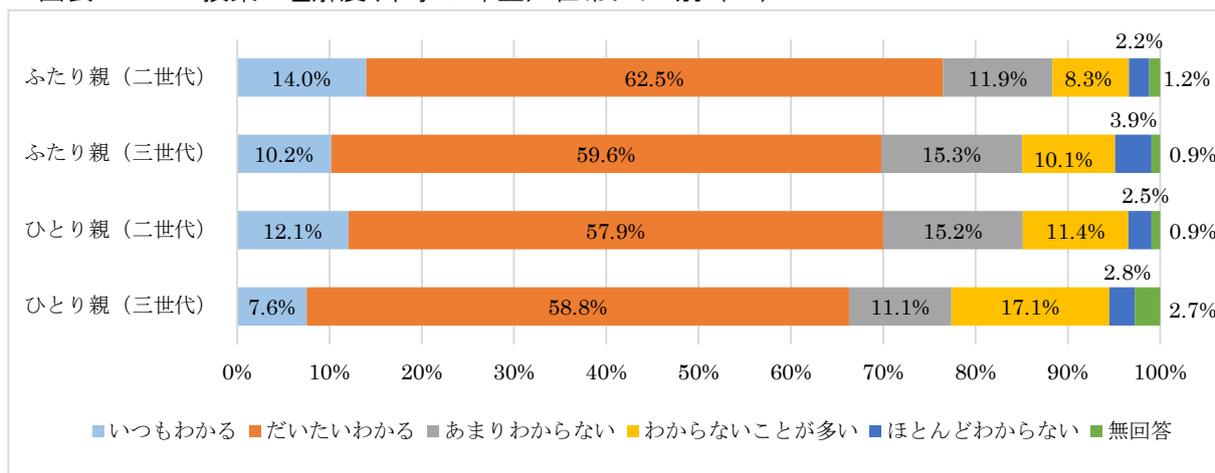
生活困難度別には、一般層の 79.5%は、授業が「いつもわかる」、「だいたいわかる」と回答しているのに対し、困窮層では約半数 (51.5%) が学校の授業をよくわからない(「あまりわからない」、「わからないことが多い」、「ほとんどわからない」と回答している。世帯タイプ別に見ると、ふたり親 (三世代) は 29.3%、ひとり親 (二世代) は、29.1%、ひとり親 (三世代) 世帯は 31.0%が授業をよくわからないと回答しているが、ふたり親 (二世代) 世帯では、22.4%であった。

授業が「わからないことが多い」、「ほとんどわからない」と回答した子供に、いつからわからなくなったのか聞いたところ、「中学 1 年生のころ」と回答した子供が最も高く 40.7%であったが、34.4%は小学校の頃にわからなくなっている。また、中学 2 年生の時点で授業が「ほとんどわからない」と回答した子供の約 2 割は、小学 1 年生から小学 4 年生までの間にわからなくなっている。なお、授業がわからなくなったと答えた時期について、生活困難度別においては統計的に有意な差は見られなかった。

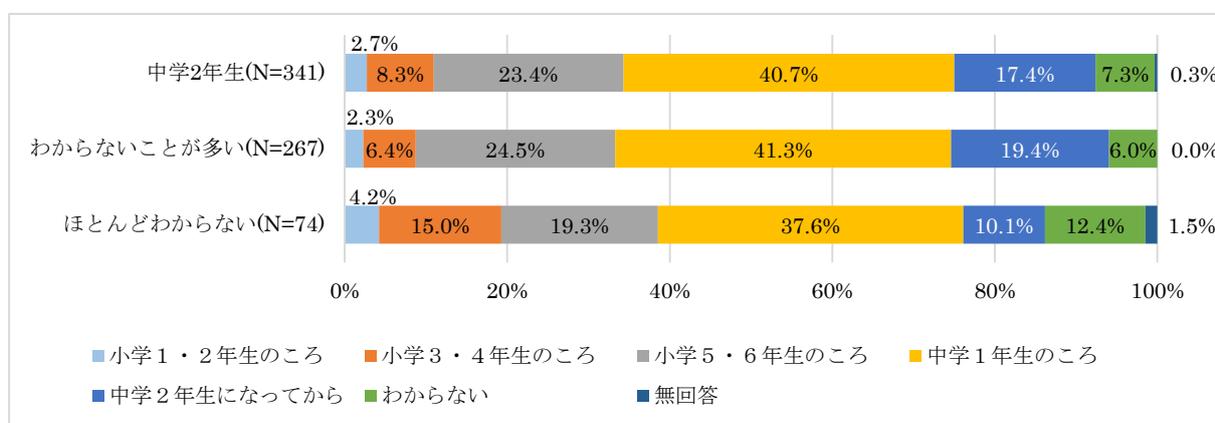
図表 3-3-4 授業の理解度(中学 2 年生):全体、生活困難度別(***)



図表 3-3-5 授業の理解度(中学 2 年生):世帯タイプ別 (**)



図表 3-3-6 授業がわからなくなった時期(中学 2 年生):授業の理解度別(*)

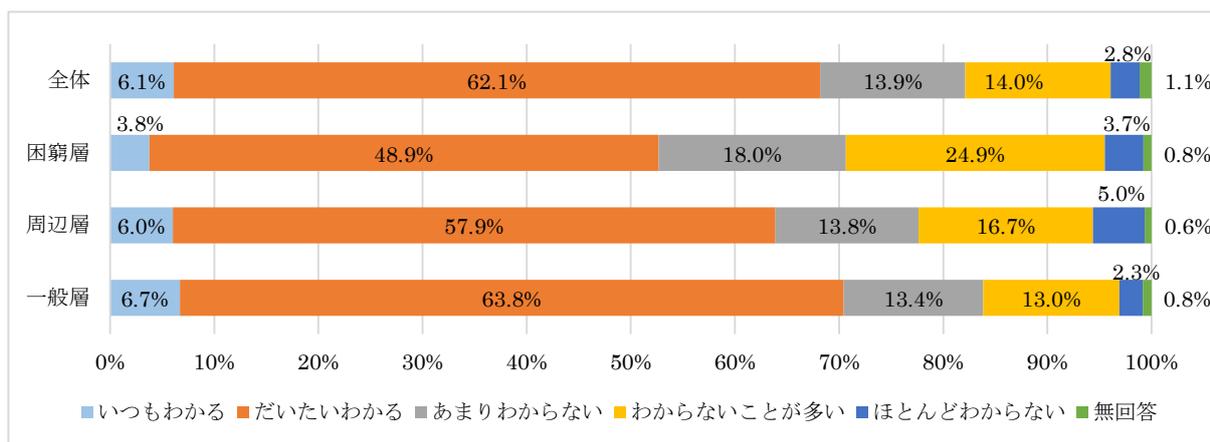


(3) 16-17 歳

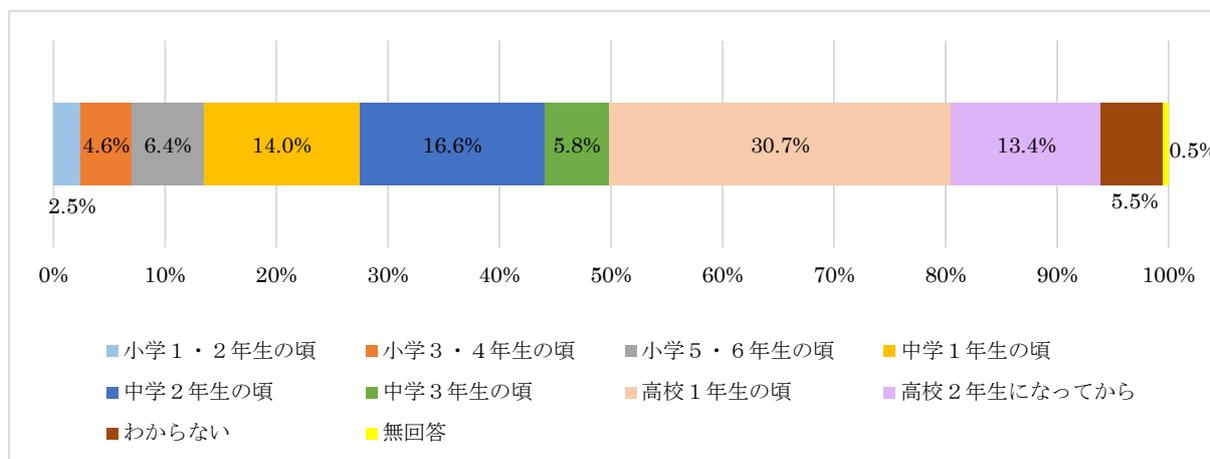
16-17 歳になると授業がよくわからないと感じる子供の割合はさらに増え、全体の 30.7%が「あまりわからない」、「わからないことが多い」、「ほとんどわからない」と回答している。生活困難度別の差は顕著であり、授業が「わからないことが多い」、「ほとんどわからない」子供は、一般層で 15.3%であるのに対し、困窮層では 28.6%と約 2 倍である。困窮層の 16-17 歳で授業が「いつもわかる」、「だいたいわかる」と答えた生徒は 5 割強となっている。

16-17 歳で授業が「わからないことが多い」、「ほとんどわからない」と回答した子供にいつからわからなくなったか聞いたところ、49.9%は高校入学前までに勉強がわからなくなっており、小学校段階では 13.5%、中学校段階では 36.4%となっている。なお、授業がわからなくなった時期について、生活困難度別においては統計的に有意な差は見られなかった。

図表 3-3-7 授業の理解度(16-17 歳):全体、生活困難度別(***)



図表 3-3-8 授業がわからなくなった時期(16-17 歳)(N=426)

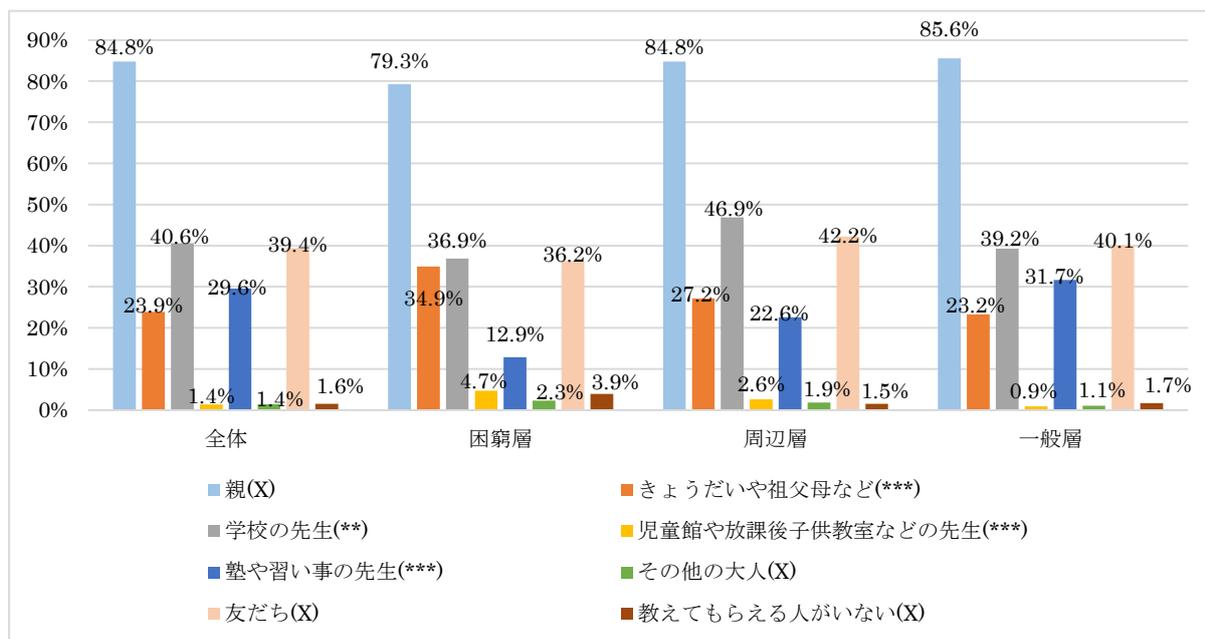


4 学校外での学習の状況

(1) 小学5年生

小学5年生に、「勉強がわからないときは、誰に教えてもらいますか」と聞いたところ、84.8%は「親」、40.6%は「学校の先生」と回答している。「塾や習い事の先生」と回答した子供は29.6%である。生活困難度別に見ると、困窮層は、周辺層・一般層に比べて「塾や習い事の先生」に教えてもらう割合が低く、「親以外の家族（きょうだいや祖父母など）」に頼る割合が高い。「児童館や放課後子供教室などの先生」と回答した子供は、困窮層の方が周辺層、一般層よりも高い割合であった。

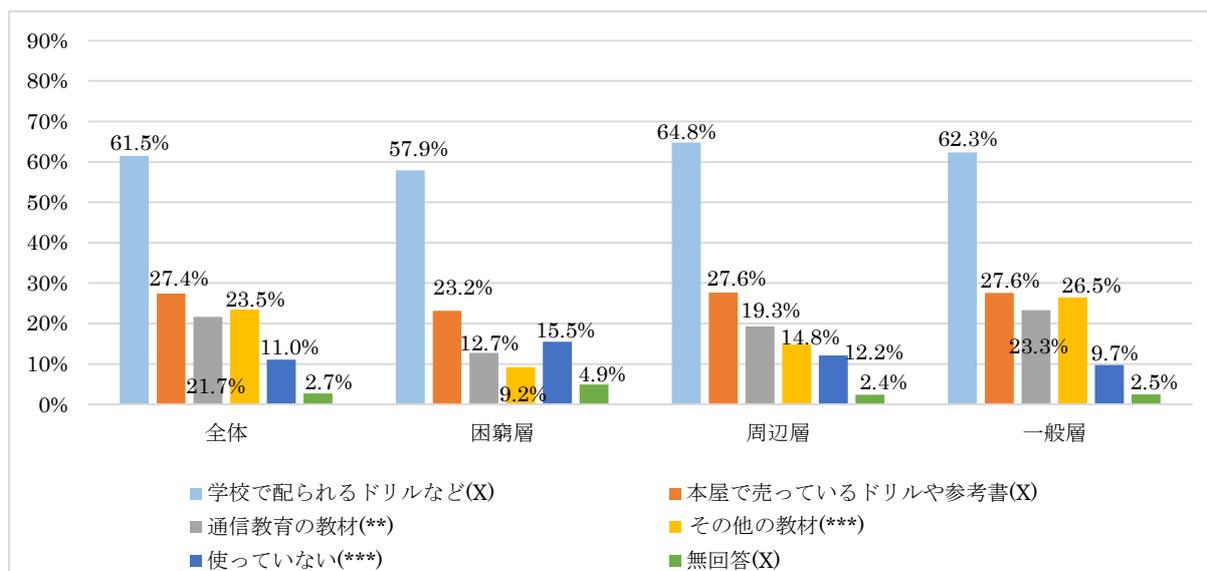
図表 3-4-1 勉強がわからない時に教えてもらう人(小学5年生):全体、生活困難度別(***)



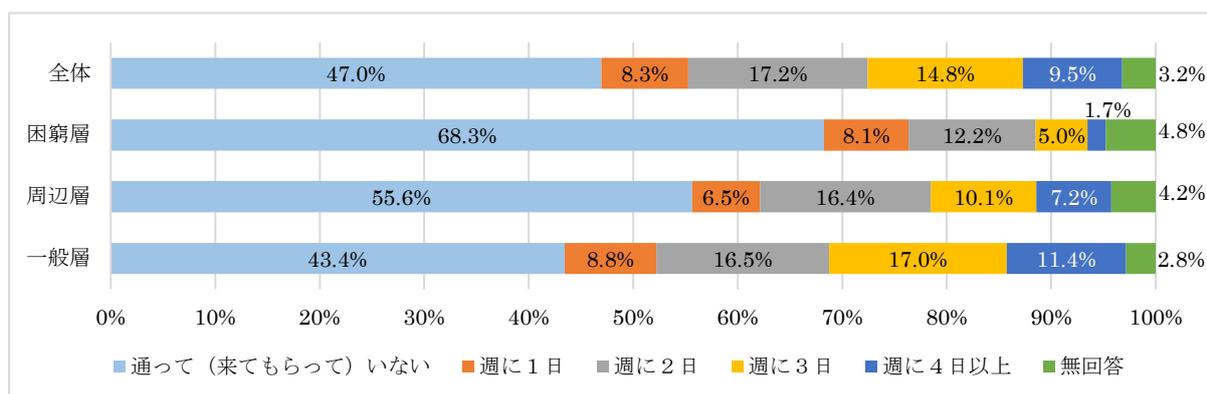
また、生活困難度別の家庭用学習教材の利用状況を見たところ、「学校で配られるドリル」や「本屋で売っているドリルや参考書」についてはどの階層でも統計的に有意な差は見られない。しかし、「通信教育の教材」や「その他（上記以外）の教材」については、困窮層は一般層に比べて利用割合が低く、困窮層の15.5%は家庭用学習教材を使っていない。

通塾（又は家庭教師）については、全体では約半数（49.8%）が塾に通って（又は家庭教師に来てもらって）おり、9.5%は週4日以上通っている。通塾の頻度は、生活困難度が上がるほど低くなり、困窮層は68.3%が塾に通っておらず、一般層との差は約25ポイントであった。

図表 3-4-2 家庭用学習教材(小学 5 年生):全体、生活困難度別(***)



図表 3-4-3 通塾(又は家庭教師)状況(小学 5 年生):全体、生活困難度別(***)



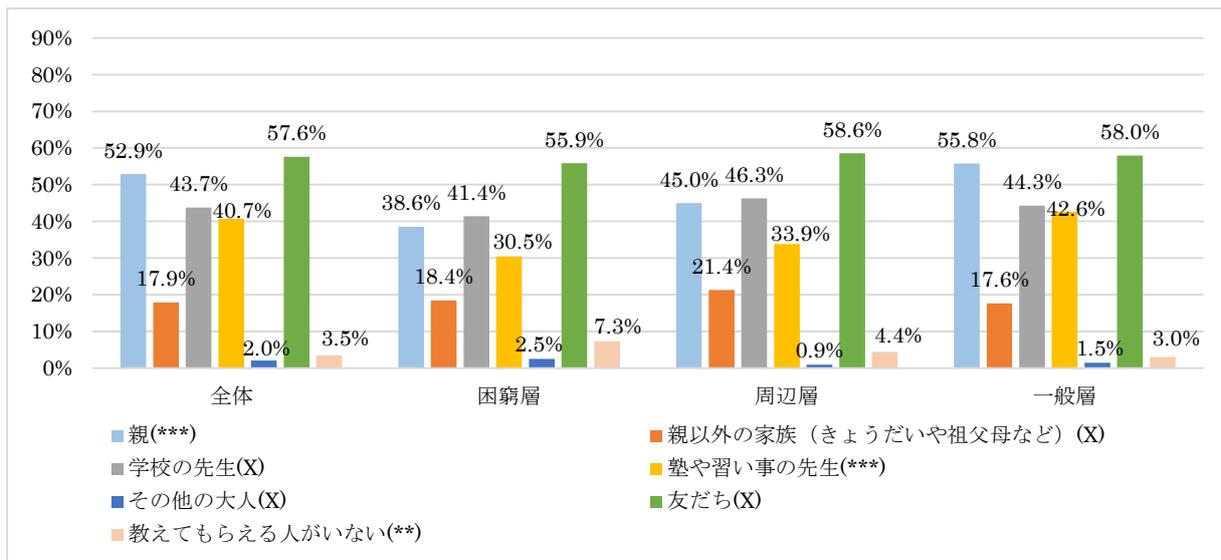
(2) 中学 2 年生

中学 2 年生については、勉強がわからない時、57.6%が「友達」に、52.9%が「親」と回答している。また、「学校の先生」は 43.7%、「塾や習い事の先生」は 40.7%となっている。「塾や習い事の先生」については、一般層では 42.6%である一方、困窮層では 30.5%、周辺層では 33.9%となっている。また、「親」に教えてもらう割合も困窮層は、周辺層、一般層よりも低い。困窮層の 7.3%は「教えてもらえる人がいない」と回答しており、これは一般層の 2 倍以上である。

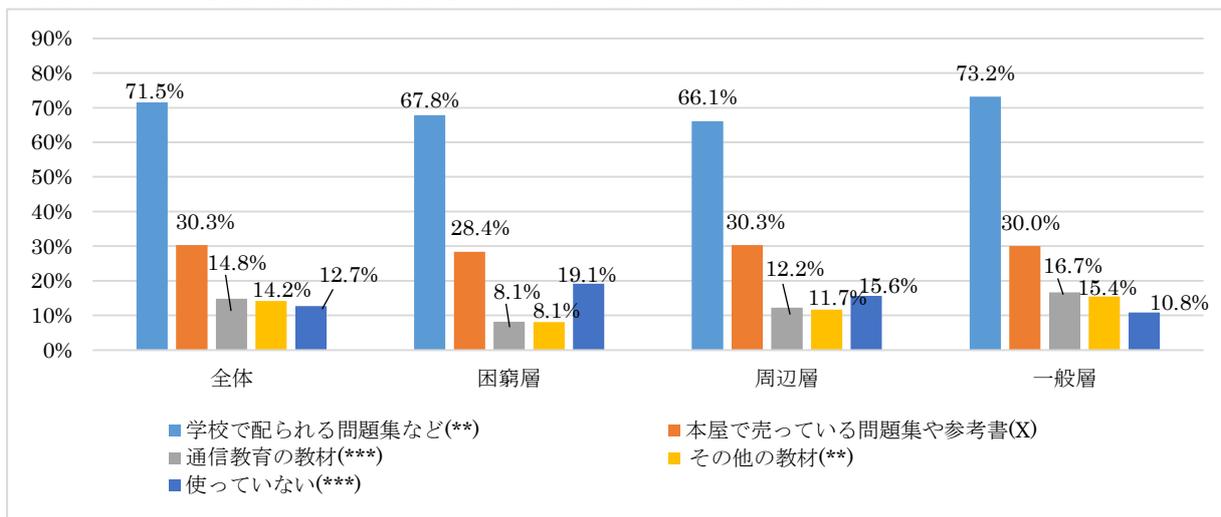
生活困難度別の家庭用学習教材の利用状況については、各層とも「学校で配られる問題集など」がいちばん高く、約 7 割が使っている。「通信教育の教材」を使う割合は、困窮層 (8.1%) は一般層 (16.7%) の約半分、「その他の教材」についても、困窮層 (8.1%) は一般層 (15.4%) の約半分となっている。困窮層の 19.1%は、家庭用学習教材を使っていない。

通塾(又は家庭教師)については、全体の 51.6%が通って(又は来てもらって)いる。小学 5 年生より若干割合が高いが、頻度は、中学 2 年生の方が若干低い。生活困難層別に見ると、困窮層の 61.3%は塾に行っておらず、一般層との差は約 16 ポイントであった。

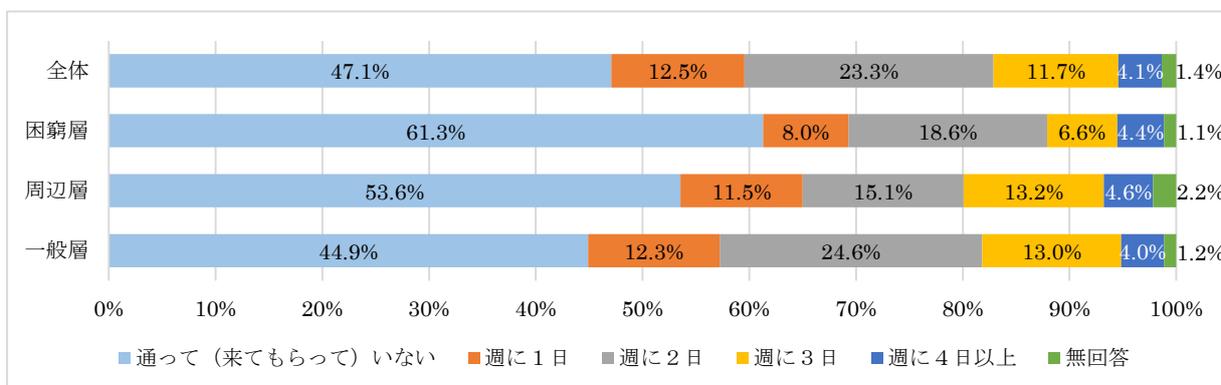
図表 3-4-4 勉強がわからない時に教えてもらう人(中学 2 年生):全体、生活困難度別



図表 3-4-5 家庭用学習教材(中学 2 年生):全体、生活困難度別



図表 3-4-6 通塾(又は家庭教師)状況(中学 2 年生):全体、生活困難度別(***)



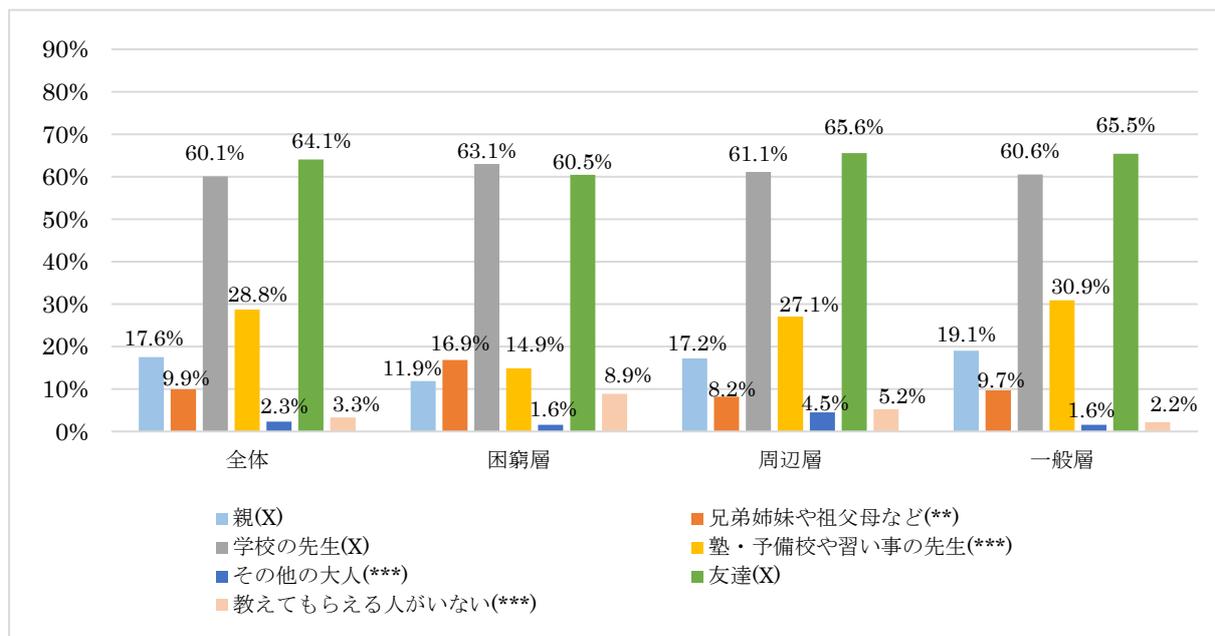
(3) 16-17 歳

16-17 歳では、勉強がわからない時に教えてもらう相手に「親」と答える子供の割合が 17.6% となっている。割合が高いのは「友達」と「学校の先生」であり、ともに約 6 割であった。生活困難度別で見ると、「学校の先生」、「友達」については統計的に有意な差はないが、「塾・予備校や習い事の先生」については、一般層、周辺層は約 3 割が教えてもらうのに対し、困窮層は 14.9% で、統計的に有意な差がある。困窮層の子供 (16.9%) は、一般層 (9.7%) や周辺層 (8.2%) に比べて「兄弟姉妹や祖父母など」と回答する割合が高い。

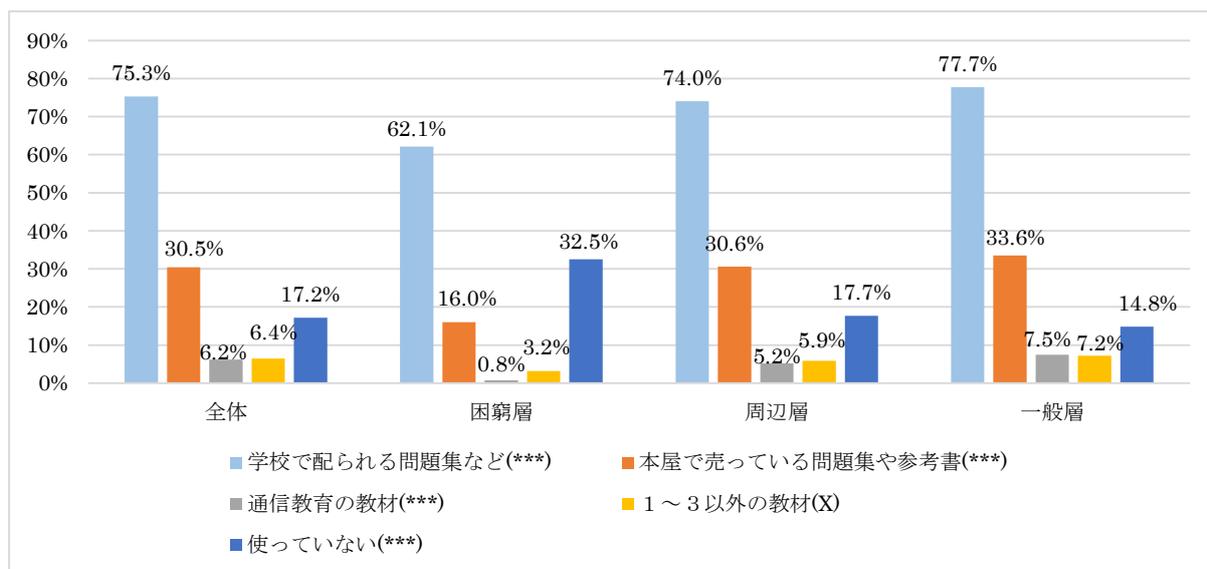
家庭用学習教材については、周辺層、一般層の約 7~8 割が「学校で配られる問題集など」を活用している一方、困窮層は 62.1% となっている。「本屋で売っている問題集や参考書」についても、困窮層は一般層の約半数となっている。「通信教育の教材」を利用する子供の割合は、困窮層は一般層、周辺層と比べて低い。「まったく使っていない」と回答した困窮層は 32.5% であり、一般層 (14.8%) よりも 2 倍以上高く、このことから、困窮層は家庭用学習教材のバリエーションが一般層に比べて少ないといえる。

通塾 (又は家庭教師) については、68.2% の子供が塾に通っておらず、この率は小学 5 年生、中学 2 年生よりも高い。生活困難度別に見ると、困窮層の 89.4% は塾に行っておらず、一般層との差は約 25 ポイントであった。

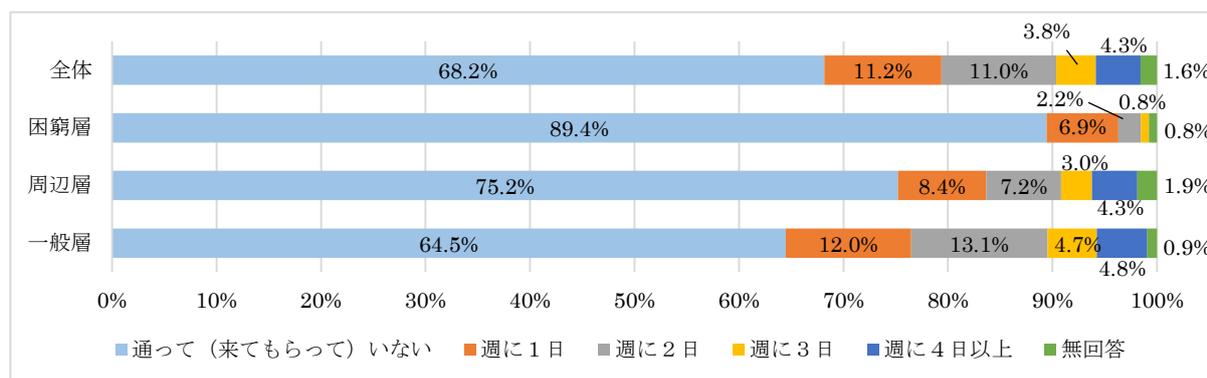
図表 3-4-7 勉強がわからない時に教えてもらう人 (16-17 歳): 全体、生活困難度別



図表 3-4-8 家庭用学習教材(16-17 歳):全体、生活困難度別(***)



図表 3-4-9 通塾(又は家庭教師)状況(16-17 歳):全体、生活困難度別(***)



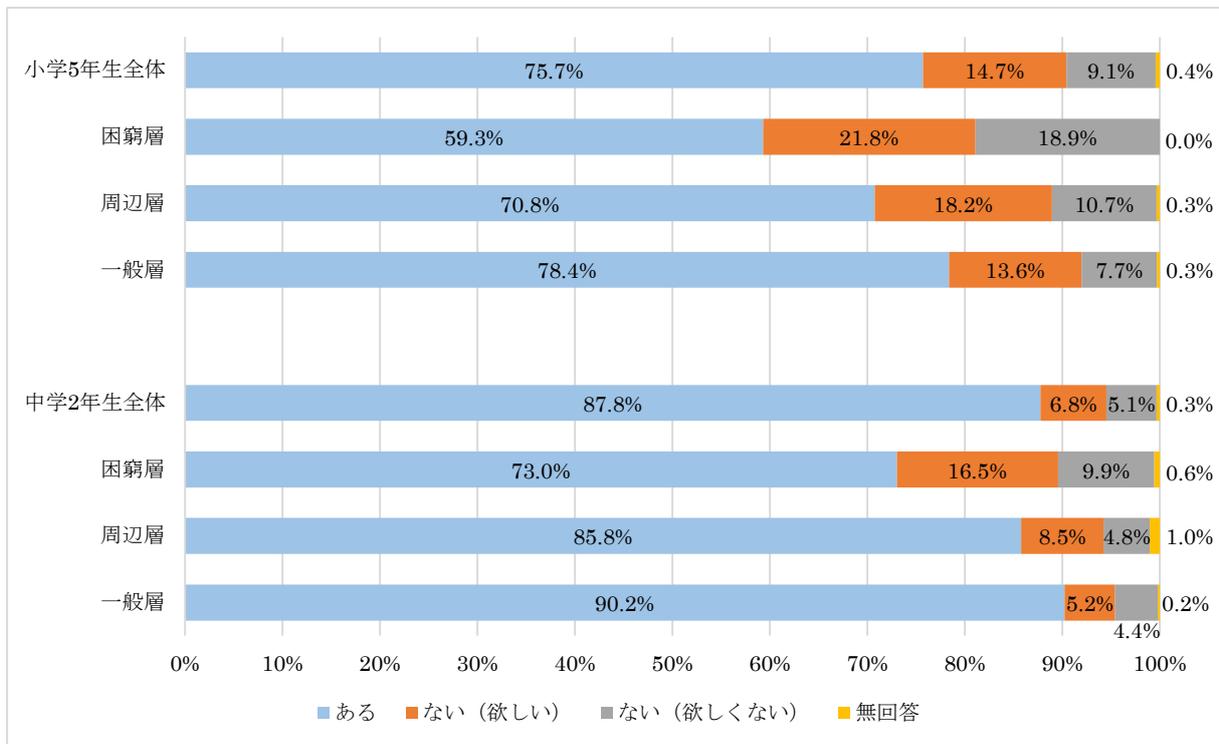
5 学習環境の欠如の状況

家庭における学習環境を見るために、小学5年生と中学2年生に「自分専用の勉強机」、「自宅で宿題（勉強）ができる場所」、「自分だけの本（学校の教科書やマンガはのぞく）」、「（自宅で）インターネットにつながるパソコン」の所有状況を聞いた。また、16・17歳には「自宅で宿題（勉強）ができる場所」、「インターネットにつながるパソコン」、「電子辞書」の所有状況を聞いた。

小学5年生は、自分専用の勉強机を持っているのは全体で75.7%であるが、残りの14.7%は「ない（欲しい）」、9.1%は「ない（欲しくない）」としている。困窮層では、「ない（欲しい）」と回答したのは21.8%であった（一般層では13.6%、周辺層では18.2%）。

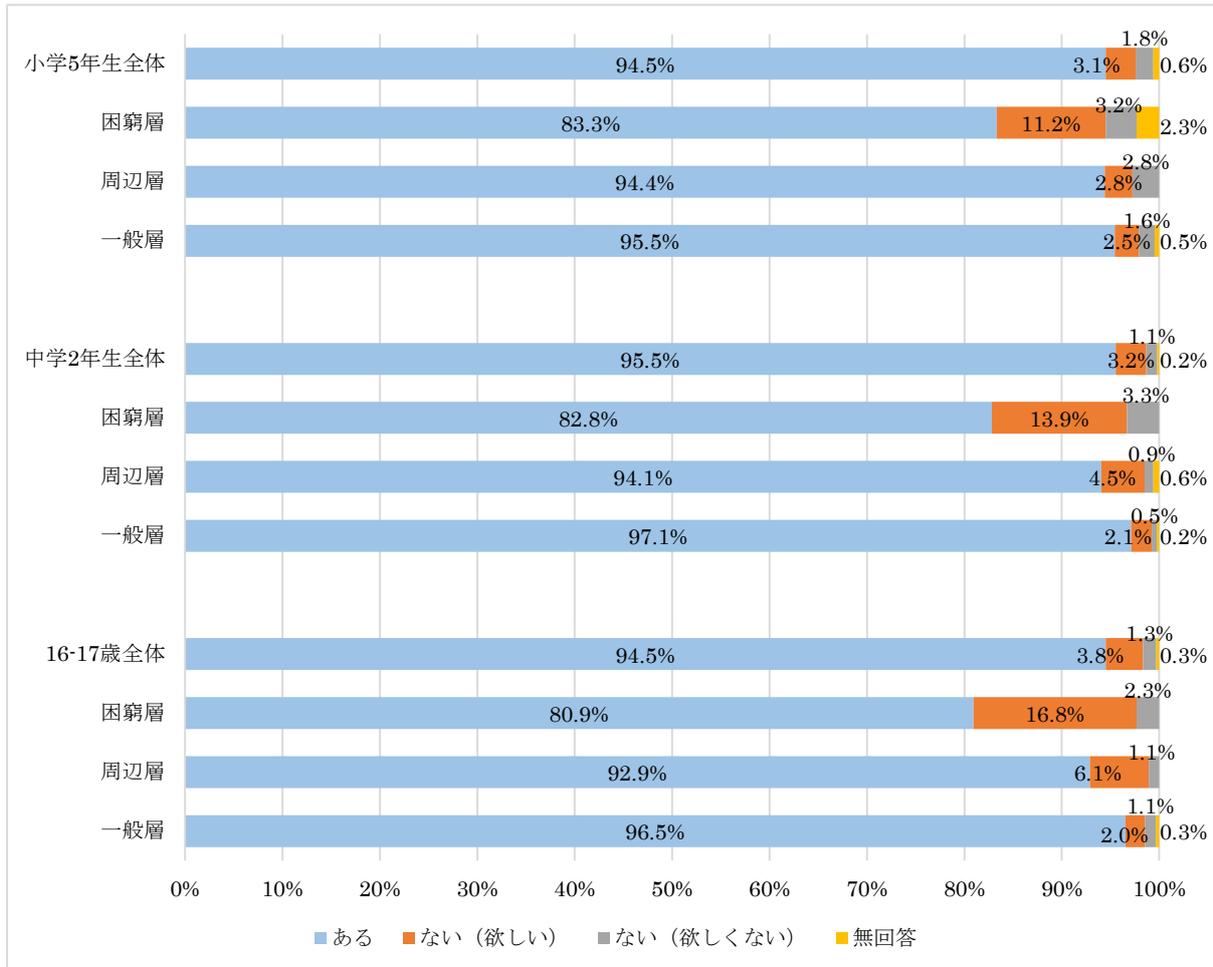
中学2年生は、87.8%が自分専用の勉強机を持っているが、6.8%は「ない（欲しい）」、5.1%は「ない（欲しくない）」としている。困窮層では、「ない（欲しい）」と回答したのは16.5%であった（一般層では5.2%、周辺層では8.5%）。

図表 3-5-1 自分専用の勉強机の有無(欠如)の状況(小学5年生・中学2年生):
生活困難度別 小学5年生(***)・中学2年生(***)



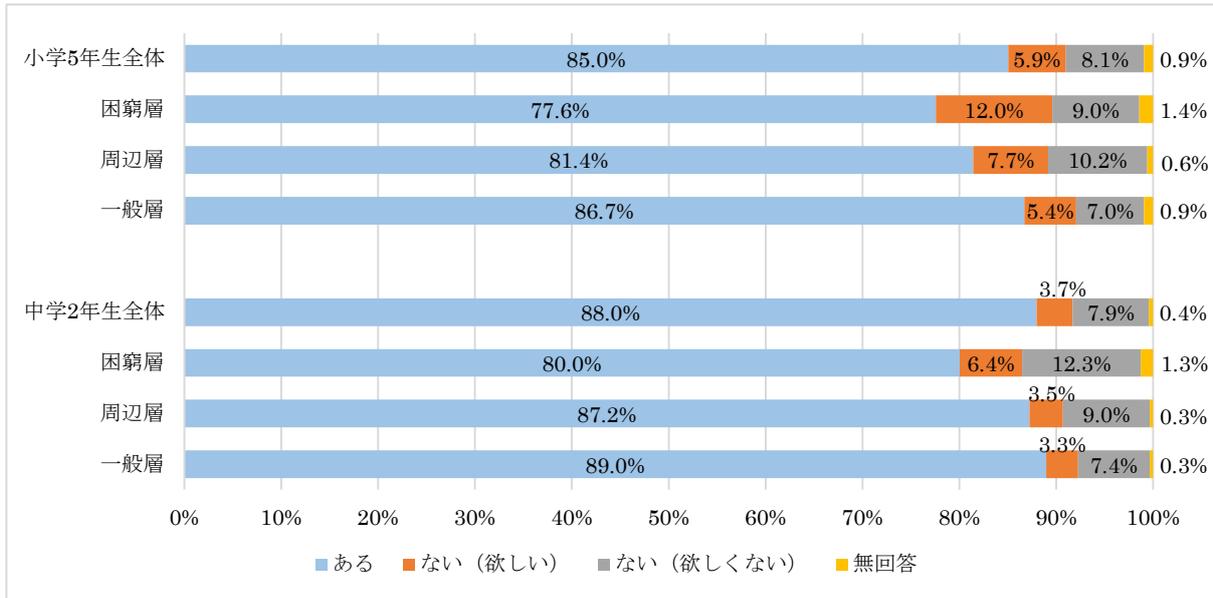
「自宅で宿題（勉強）ができる場所」については、小学5年生全体の3.1%、中学2年生の3.2%、16-17歳の3.8%が「ない（欲しい）」としている。困窮層では、この割合は、小学5年生では11.2%、中学2年生では13.9%、16-17歳では16.8%となっており、困窮層の1割以上の子供が「自宅で宿題（勉強）ができる場所」を持っていない状況にある。

図表 3-5-2 自宅で宿題(勉強)ができる場所の有無(欠如)状況(年齢層別全体、生活困難度別 小5(***) 中2(***) 16-17歳(***))



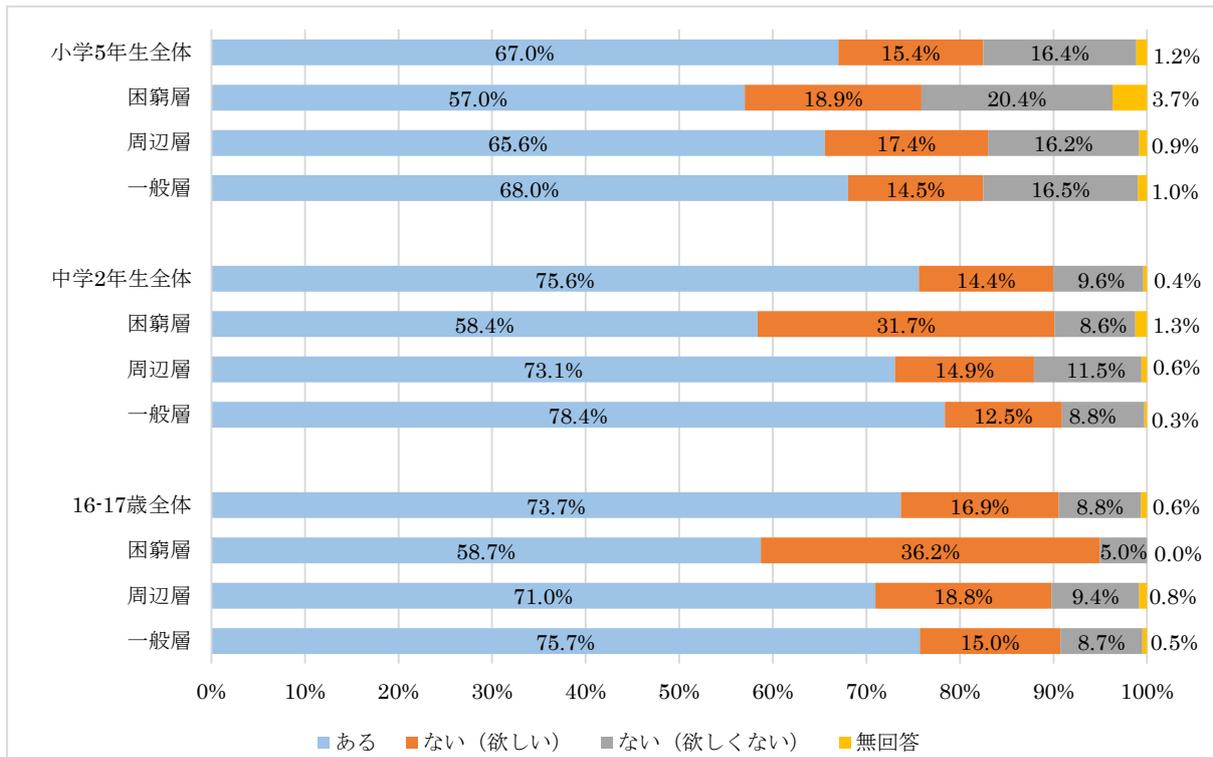
「自分だけの本（学校の教科書やマンガはのぞく）」については、小学5年生全体の5.9%が「ない（欲しい）」と回答している。「ない（欲しくない）」は8.1%であり、合わせて14.0%の子供が「自分だけの本」を持っていない。「ない（欲しい）」と回答した子供の割合は、生活困難度が高くなるほど高くなり、困窮層では12.0%と、一般層の5.4%の2倍強である。中学2年生では、「ない（欲しい）」とした子供は小学5年生より低くなるものの、生活困難度が高くなるほど高くなるという同様の傾向がある。

図表 3-5-3 自分だけの本(学校の教科書やマンガは除く)の有無(欠如)の状況
(小学5年生・中学2年生):生活困難度別 小学5年生 (***)・中学2年生(***)



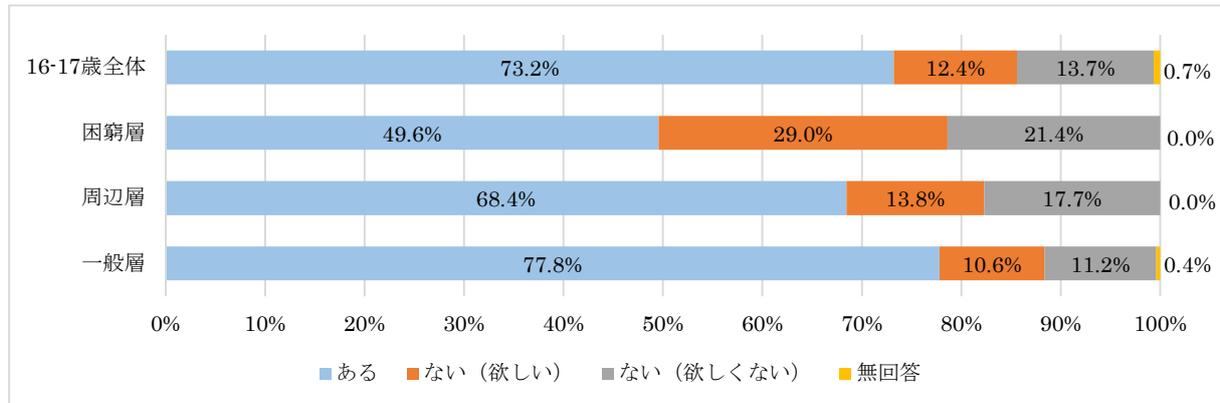
「インターネットにつながるパソコン」は、近年、学校における学習においても不可欠となってきたが、小学5年生の31.8%、中学2年生の24.0%、16-17歳の25.7%が「ない(欲しい)」、「ない(欲しくない)」と回答している。「ない(欲しい)」子供に限っても、各年齢層で1割を超える。この割合は、生活困難度が高いほど高くなり、特に、中学2年生、16-17歳の困難層では「ない(欲しい)」子供が3割以上となる。

図表 3-5-4 自宅でインターネットにつながるパソコンの有無(欠如)の状況(年齢層別全体、生活困難度別 小学5年生 (***)・中学2年生(***)・16-17歳(***))



16-17歳の「電子辞書」の所有については、全体の73.2%が「ある」のに対し、12.4%が「ない（欲しい）」と回答している。ここでも、困窮層ほど「ない（欲しい）」子供の割合が高く、困窮層の保有率は49.6%であり、29.0%が「ない（欲しい）」と回答している。

図表 3-5-5 電子辞書の有無(欠如)の状況(16-17歳):全体+生活困難度別(***)



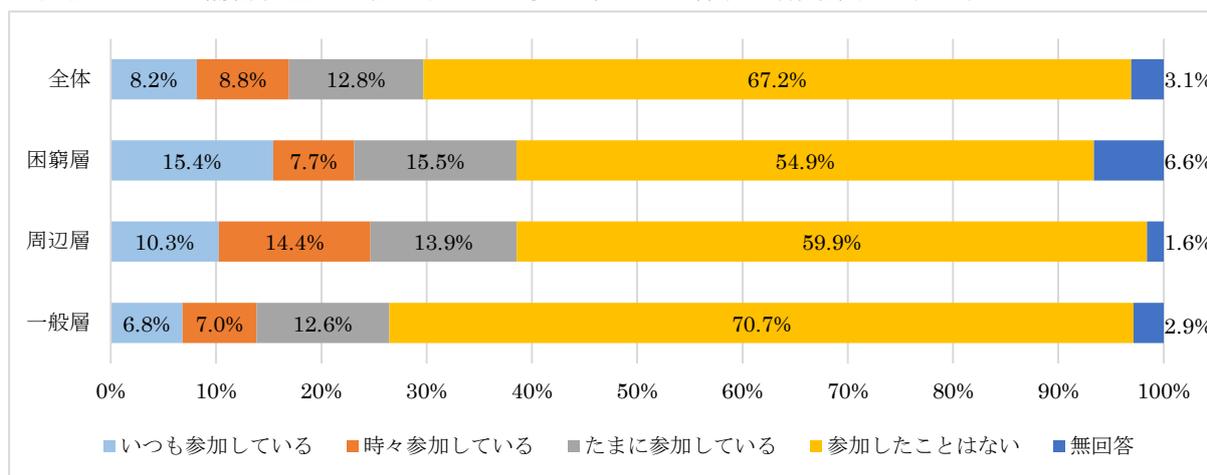
6 補習教室への参加状況・参加しない理由

今回調査した4自治体中、3つの自治体において小中学校で「補習教室」を実施しているため、その参加状況について3自治体の子供に聞いた。その結果、小学5年生は、8.2%が「いつも」、8.8%が「時々」、12.8%が「たまに」補習教室に参加していると回答した。一方、「参加したことがない」と答えた小学5年生は67.2%であった。生活困難度別で見ると、困窮層、周辺層の約2割は「いつも」又は「時々」参加しているが、一般層は困窮層に比べて参加している割合が低い。困窮層においては、「いつも」参加している子供は15.4%であり、他の層に比べて高いものの、過半数である54.9%は「参加したことがない」としている。

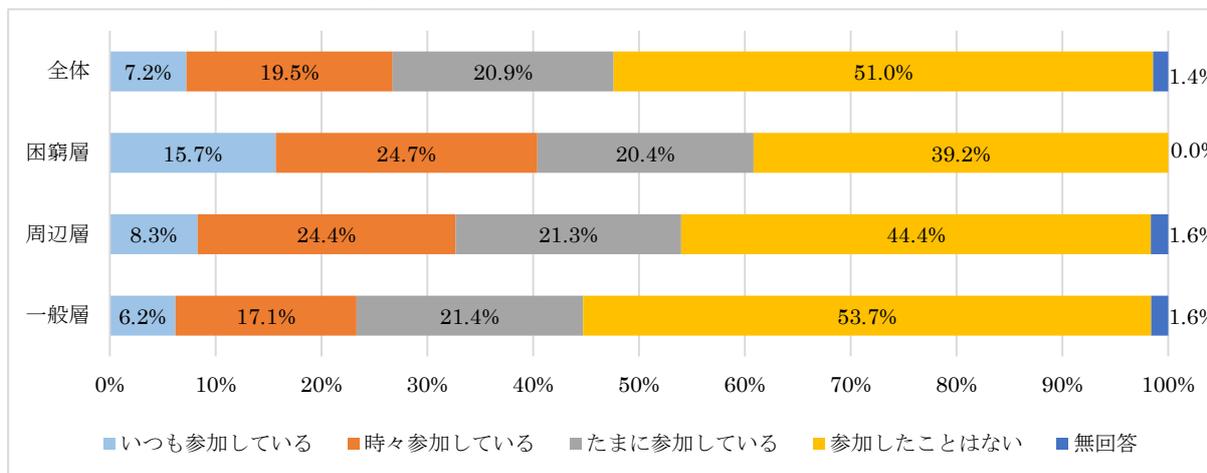
中学2年生では、7.2%が「いつも」、19.5%が「時々」、20.9%が「たまに」参加しており、小学5年生に比べると参加している割合は高い。生活困難度別に見ると、困窮層の40.4%、周辺層の32.7%が「いつも」又は「時々」補習に参加している。困窮層では、参加していない子供が39.2%存在する。

中学2年生を授業の理解度別に見ると、授業の理解度が下がるほど、補習教室に「いつも」又は「時々」参加する割合が高くなるが、授業が「ほとんどわからない」子供は、補習教室に「いつも参加している」、「時々参加している」割合が低く、「たまに」しか参加しない割合が高い傾向にある。

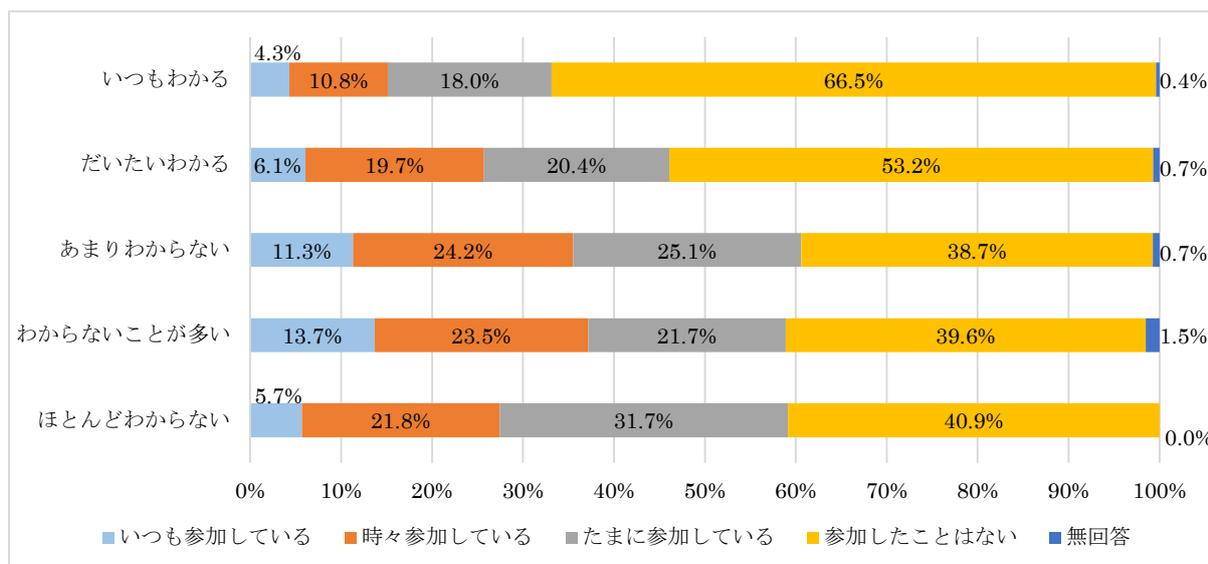
図表 3-6-1 補習教室への参加状況(小学5年生):全体、生活困難度別(***)



図表 3-6-2 補習教室への参加状況(中学2年生):全体、生活困難度別(***)



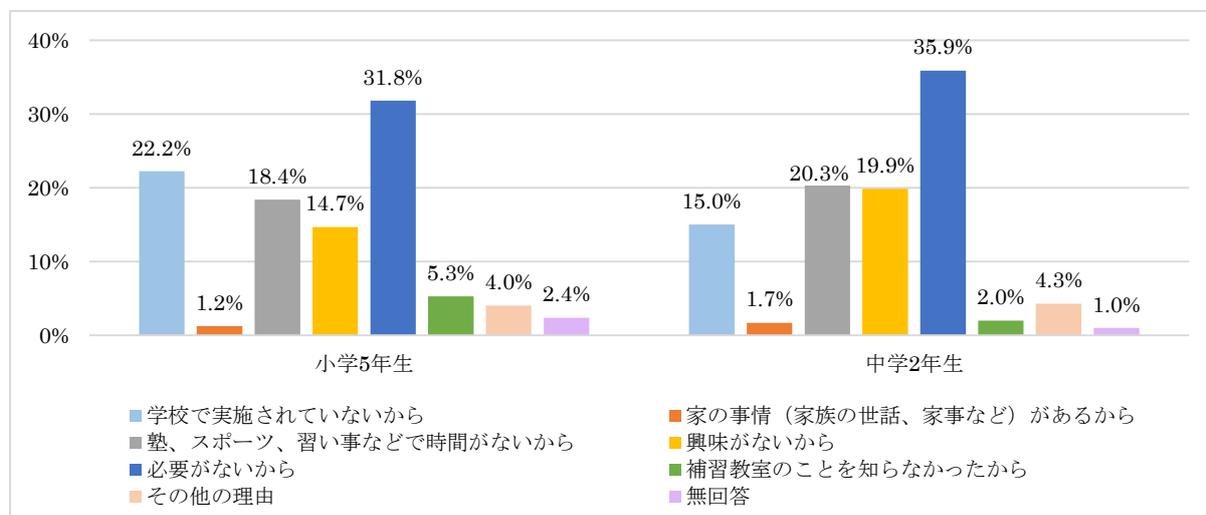
図表 3-6-3 補習教室への参加状況(中学 2 年生):授業の理解度別(***)



「補習教室」に「たまに参加している」又は「参加したことはない」子供に理由を聞いたところ、小学 5 年生、中学 2 年生ともに「必要がないから」がいちばん高く、小学 5 年生で 31.8%、中学 2 年生で 35.9%となっている。また、「塾、スポーツ、習い事などで時間がないから」（小学 5 年生 18.4%、中学 2 年生 20.3%）など、そもそも補習教室のニーズが大きくないと思われる回答もあるものの、「学校でやっていないから」（小学 5 年生 22.2%、中学 2 年生 15.0%）との回答も多く、補習教室が提供されれば参加すると思われる子供も一定数存在する。また、「家の事情（家族の世話、家事などがあるから）」（小学 5 年生 1.2%、中学 2 年生 1.7%）と回答した子供も若干であるが存在した。「興味がないから」と回答した子供は、小学 5 年生では 14.7%、中学 2 年生では 19.9%であるが、この層については、勉強に興味を示すように働きかけることでニーズが掘り起こされる可能性もある。

また、保護者の補習教室の利用意向については、小学 5 年生の保護者の 32.7%、中学 2 年生の保護者の 38.3%、16-17 歳の保護者の 34.1%が「学校が実施する補講（学習支援）」利用に興味があるとしている（185 頁 図表 7-3-11「支援サービスの利用意向」参照）。

図表 3-6-4 補習教室に参加しない理由(小学 5 年生・中学 2 年生)

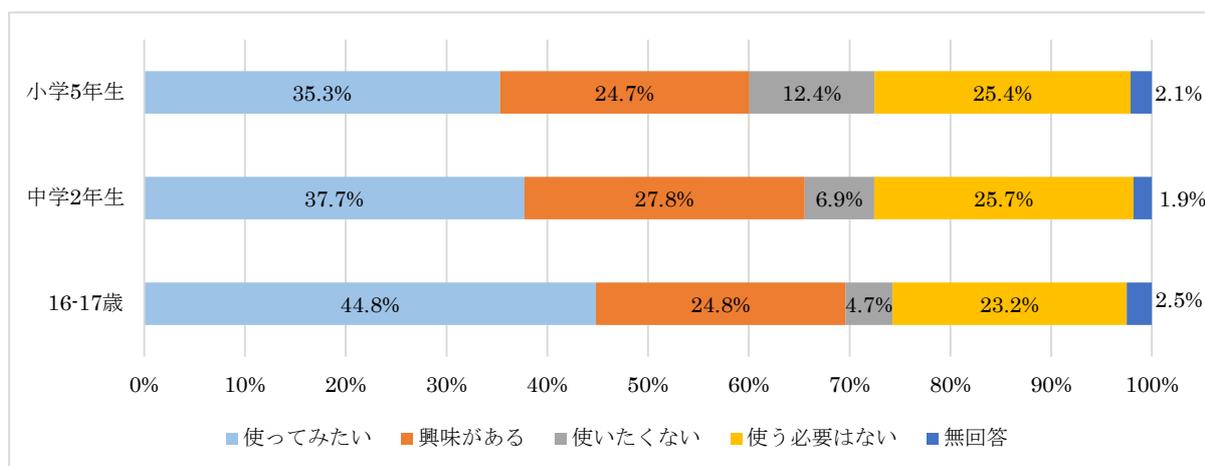


7 学習関連の支援プログラムの利用意向

(1) 勉強ができる場所の利用意向

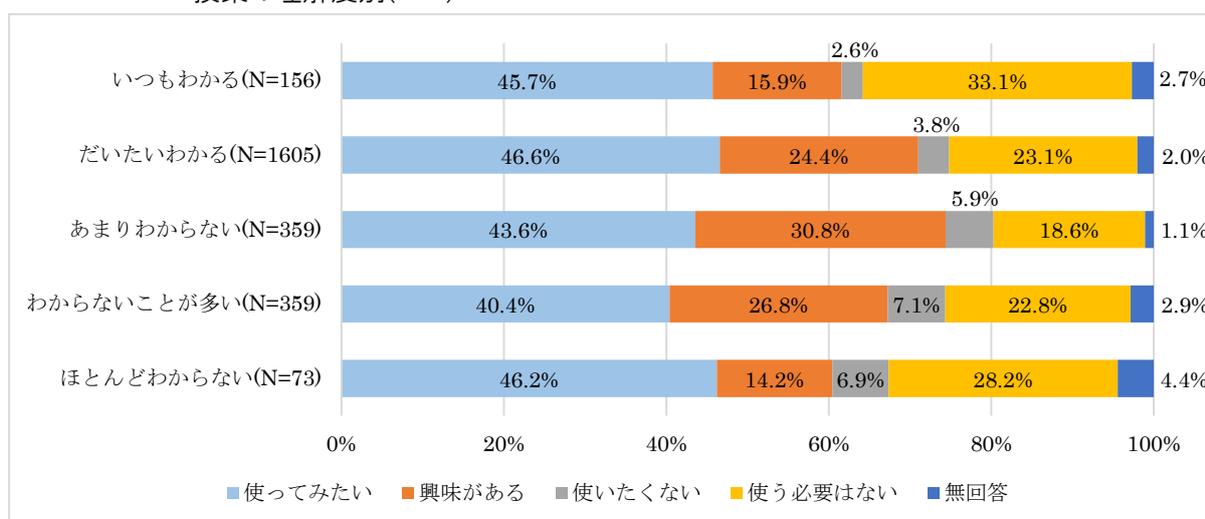
学習の妨げになる要因として、勉強する環境の欠如が考えられることから、子供に「家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所」の利用意向を聞いた。その結果、小学5年生の60.0%、中学2年生の65.5%、16-17歳の69.6%がそのような場所を「使ってみたい」又は「興味がある」と回答しており、自習室や自習スペースに対する要望が高いことがわかった。この利用意向について、生活困難度別、世帯タイプ別に統計的に有意な差はなく、どの層の子供であっても一定の利用意向があった。また、この利用意向は、小中学生では授業がよくわかる子供ほど高いのに対し、16-17歳においては、授業が「あまりわからない」と答えた子供の関心が高い(74.4%)。高校生以上の子供が利用することができる自習室や自習スペースが、勉強に問題を抱えている子供にとっても必要であることがわかる。

図表 3-7-1 「家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所」の利用意向(年齢層別)



図表 3-7-2 「家で勉強できない時、静かに勉強ができる場所」の利用意向(16-17歳)

:授業の理解度別(***)



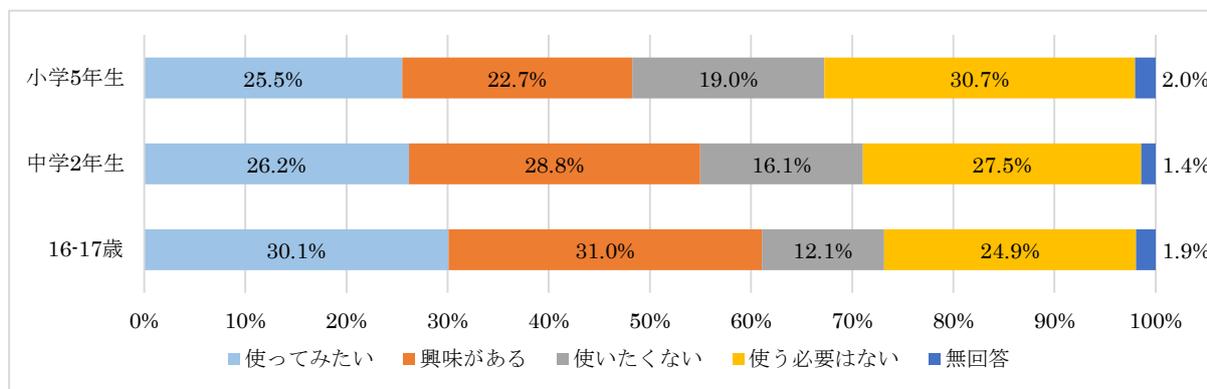
(2) 学校外での無料の学習支援

近年の学習支援の全国的な広がりを背景に、「大学生のボランティアが勉強を無料でみてくれる場所」についての利用意向を子供に聞いた。その結果、授業の理解度に差はあっても、小学5年生の48.2%、中学2年生の55.0%、16-17歳の61.1%が「使ってみたい」又は「興味がある」と回答している。

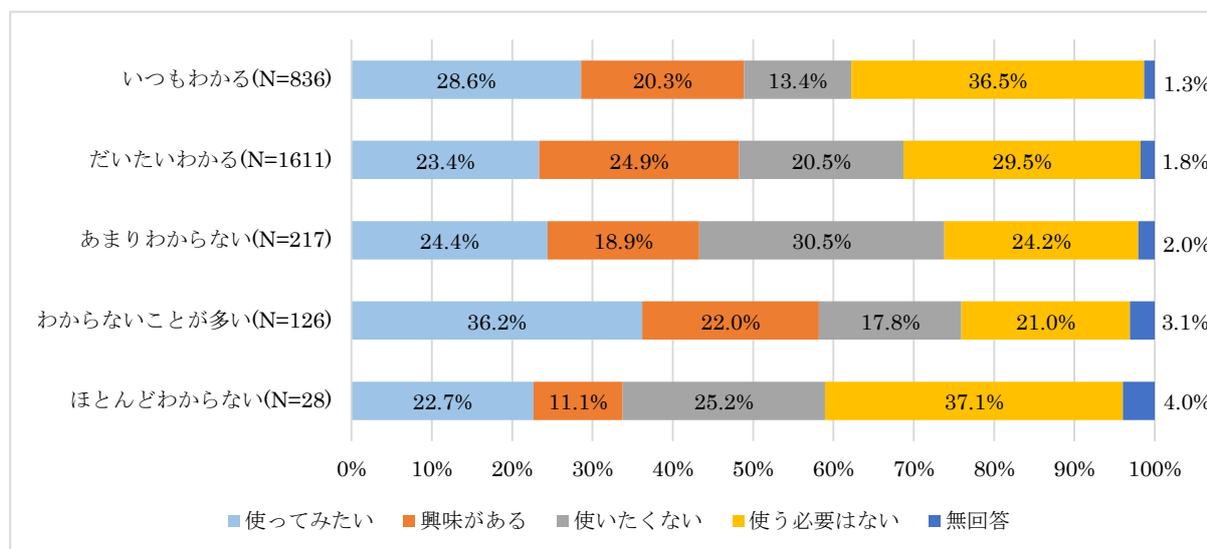
大学生による学習支援に対しては、小学校5年生の授業が「ほとんどわからない」と答えた子供以外は約4割以上と、利用意向が高い。一方授業が「ほとんどわからない」と答えた小学5年生は、「使ってみたい」又は「興味がある」とする割合が、33.8%にとどまる。

16-17歳では、授業が「だいたいわかる」、「あまりわからない」、「わからないことが多い」と回答した子供のうち「使ってみたい」又は「興味がある」とする割合が約6割であり、ニーズが高い。

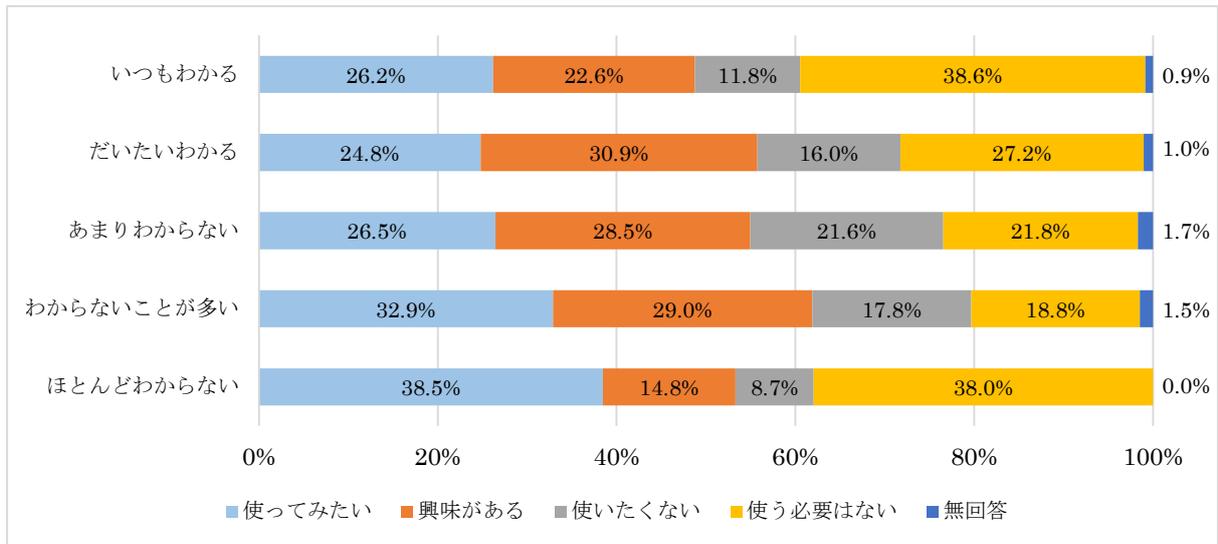
図表 3-7-3 「大学生のボランティアが勉強を無料でみてくれる場所」の利用意向(年齢層別)



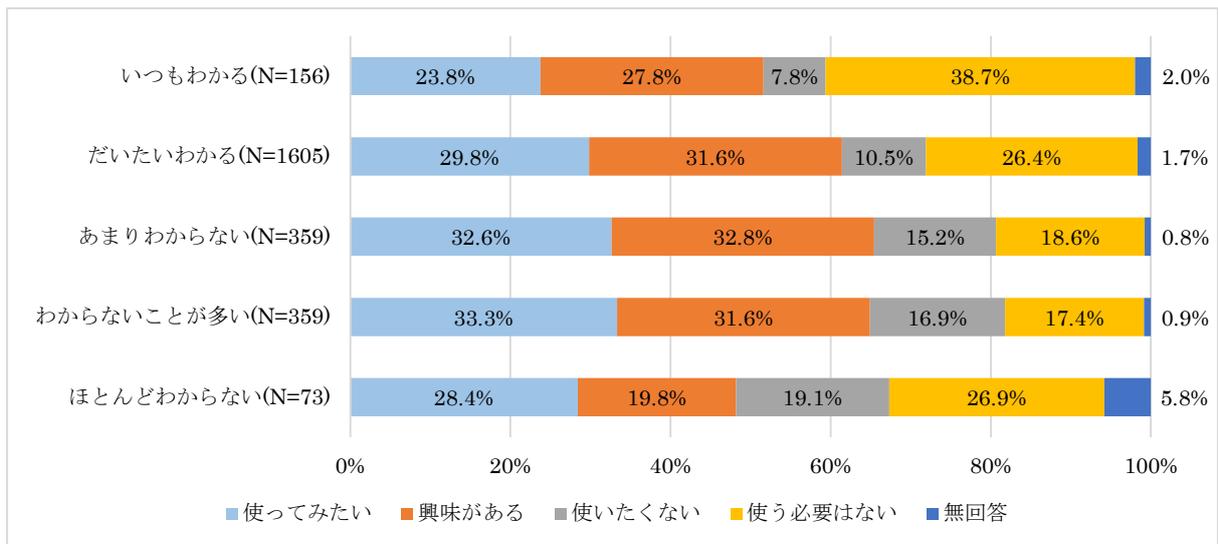
図表 3-7-4 「大学生のボランティアが勉強を無料でみてくれる場所」の利用意向(小学5年生)
:授業の理解度別(***)



図表 3-7-5 「大学生のボランティアが勉強を無料でみてくれる場所」の利用意向(中学 2 年生)
:授業の理解度別(***)



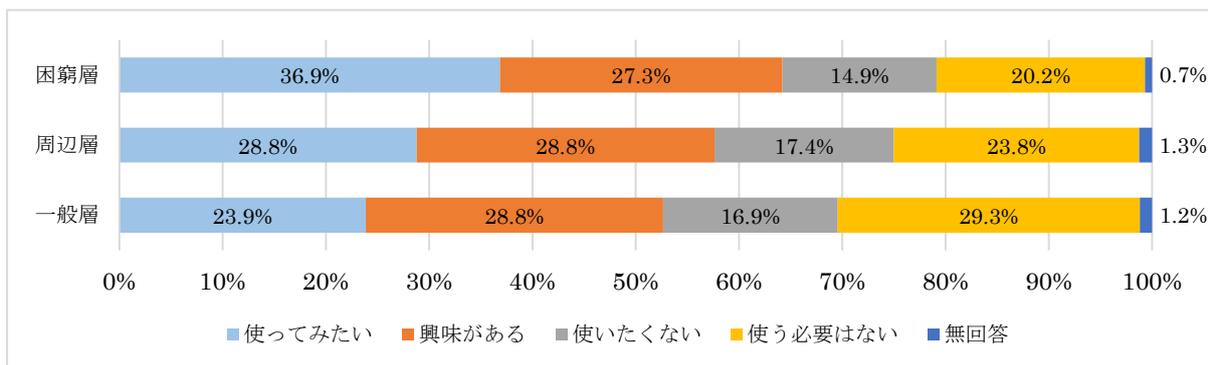
図表 3-7-6 「大学生のボランティアが勉強を無料でみてくれる場所」の利用意向(16-17 歳)
:授業の理解度別(***)



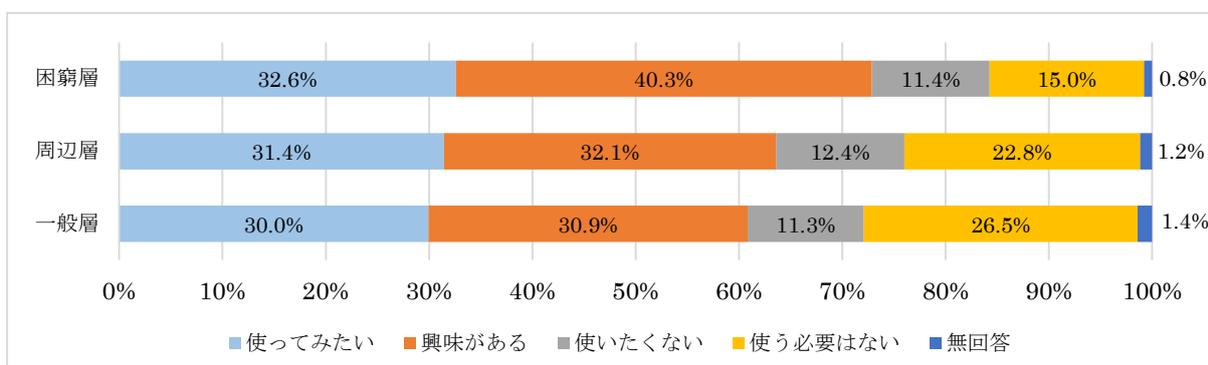
生活困難度別に見ると、中学 2 年生では困窮層ほど大学生による学習支援への関心が高く、困窮層では 64.2%である。

また、保護者に「学校以外が実施する学習支援」について利用意向を聞いたところ、小学 5 年生の保護者の 31.9%、中学 2 年生の保護者の 36.0%、16-17 歳の保護者の 27.4%が「興味がある」としている(185 頁 図表 7-3-11「支援サービスの利用意向」参照)。

図表 3-7-7 大学生が勉強を無料でみてくれる場所の利用意向(中学 2 年生):生活困難度別(***)



図表 3-7-8 大学生が勉強を無料でみてくれる場所の利用意向(16-17 歳):生活困難度別(*)



(3) 通信教育の費用補助

「低額・無料で通信教育が受けられるサービス」について、16-17 歳の子供に利用意向を聞いた。その結果、全体の 49.0%が「使ってみたい」又は「興味がある」と回答している。生活困難度別に見ると、困窮層では 61.1%、周辺層では 52.8%に利用意向がある。「使ってみたい」という積極的な回答に限ってみても、困窮層、周辺層の約 4 人に 1 人が利用意向を持っている。

図表 3-7-9 「低額、無料で通信教育が受けられるサービス」の利用意向(16-17 歳)
:生活困難度別(**)

